慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	安岡章太郎『流離譚』校異 (一)
Sub Title	
Author	成田, 朱凜(Narita, Akari)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2022
Jtitle	三田國文 No.67 (2022. 12) ,p.149- 181
JaLC DOI	10.14991/002.20221200-0149
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20221200-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

安岡章太郎『流離譚』校異（一）

成田　朱凜

安岡章太郎『流離譚』が何度も書きかえられたことは、『安岡章太郎集』（岩波書店）の「後書」他、全集の広告や対談での発言等によって明らかである。実際、史料を引用し、それに対する「私」の考えで構成される『流離譚』には、新たな史料の発見や情報の付加をきっかけに「私」が以前の誤認を訂正する遡行的な語りが特徴として見出せるが、これには改稿によるものも含まれている。こうして初出の雑誌連載中から最終的に全集におさめられるまで、「私」の認識と本文は更新され続けた。考察については別稿を用意しているが、本稿では前提として重要な異同を整理する。

［凡例］

一、本稿に使用した版は次の通りである。

(1)　全集『安岡章太郎集』第八巻・第九巻（岩波書店、一九八八年一月・二月）

(2)　単行本『流離譚』上巻・下巻（新潮社、一九八一年十二月）

(3)　初出「流離譚」全五十五回（『新潮』一九七六年三月～一九八一年四月、休載あり）

二、『流離譚』の異同は、記号・単語レベルのものから数ページにわたるものまで幅広く、内容としては間違いの訂正、人物・事件に関する情報や史料引用の追加及び削除、それによる加筆修正が多い。今回は紙幅の都合上、些細な表現の変更、単純な情報（史料）の追加・訂正・削除等の異同は省き、厳選した一部（特に意味や内容が大きく異なるもの、広範囲に及ぶ異同等）のみを示す。

三、頻出するため校異表では取り上げないが、初出から単行本・単行本から全集におさめられる際に統一して変更されたものについて、注意すべきものを示す。

・地名の表記変更：「大阪」→「大坂」等。初出では全て「大阪」表記だが、単行本では明治以前の「大阪」は「大坂」に変更されている。

・人名の表記変更：「坂本竜馬」→「坂本龍馬」、「吉村寅太郎」→「吉村寅太郎」等。単行本にて変更。

・仮名遣いの変更：初出と単行本では歴史的仮名遣い、全集では現代仮名遣いが用いられている。

四、異同は次の要領で示した。

・頁数と行数は(1)『安岡章太郎集』第八巻・第九巻に従った。

・／は改行、［…］は省略をあらわす。

・史料引用部の二字下げや、行あけ、訓点は省略した。

・ルビは原則として省略した。

・表におさまらないものは「※」を付し、後ろの頁にまとめて示した。

・軽微な異同に関しては、当該部分を太字であらわし、部分的に異同を示した。

・同一史料からの引用部について、それが完全に同文である場合には、当該部分に二重線を付し、二度目の引用は省略した。

・その他注記は〔　〕内に示した。

五、初出の連載第八回にあたる範囲は単行本にて大幅に構成が組みかえられた。以下、『安岡章太郎集』第八巻の本文を基準に、内容によって七つのパートにわけ、その変更を示す。

（数字は頁数・行数をあらわす）

①一一三・一「文久二年」～一一五・三「であることだ。」

②一一五・四「じつは」～一一六・一三「なかろうか。」

③一一六・一四「いうまでも」～一三〇・五「ものであろう。」

④一三〇・六「ところで」～一三一・一五「違いない。」

⑤一三一・一六「嘉助に」～一三七・一三「ではないか。」

⑥一三七・一四「じつは」～一四一・八「にぎられていた。」

⑦一四一・八「武市瑞山」～一四三・一七「思われる。」

単行本・全集の構成が①②③④⑤⑥⑦の順であるのに対して初出は④①❷③⑤⑦の順である。❷は用いられる史料が②とは異なるため別の記号であらわした。また、初出に⑥は存在しない。

全集一二三頁～一四三頁の範囲は、右の番号を付すことでパート毎に異同を示している。

頁	行	(1)『安岡章太郎集』第八巻	(2)単行本『流離譚』上巻	(3)初出『新潮』
12	6	なぜだろう?	なぜだらう? これは不思議といへば不思議なことだ。	〔同上〕
12	8	明治維新史と郷土史の研究は年々さかんであって、	明治維新史と郷土史は、ブームといつていい現象がたしかにあつた。〔同上〕	〔同上〕
17	3	二人とも、いわゆる維新の功臣であって、嘉助には従四位、覚之助には正五位がそれぞれ遺贈されており、また覚之助には藩主からも		覚之助にも、なぜ同じやうな処置ができないのか? まして覚之助は、罪人として処刑されたのではなく、名誉の戦死をとげて、藩主から
17	8	そういう一家一門の誇りというべき人物を出した本家の遺族が、なぜ郷土を離れて寒冷の旧敵地に	〔同上〕	普通なら遺骨だけでも凱旋させ、墓地に特別大きな墓石でも建てて、一家一門の誇りとしさうなものではないか。それを、なぜ寒冷の敵地会津に残したまま、やがて遺族がそちらへ
32	4	実在の人物であるかどうかを確かめることもさることながら、	〔同上〕	実在の人物であらうとなからうと、それほどの興味はない。それよりも私には、
41	11	兼山がこのように信奉されるようになったのは、明治維新以降のことかもしれない。	兼山をこのやうに信奉したのは、父も母も郷士の家に生れたためかもしれない。おそらく武市瑞山の場合は、あまりに影響の大きい人物であるために、この程度のことは黙認されたのであらうか。また**龍馬**の父親の場合は、才谷屋は非常な富豪で**家老や、おそらく山内家**にも金を貸してゐたので、藩も手が出しにくかつたのであらうか。／いづれにしても	兼山をこのやうに信奉したのは、父も母も郷士の家に生れたために過ぎないかもしれない。〔同上。但し 龍馬→竜馬 家老や、おそらく山内家→山内家〕
51	1	いずれにしても	〔同上〕	
51	12		その他、服装に関することでは、城下で下駄をはくことを許される者は上士に限られるとか、細ごまとした規則がいろいろあって、それがまた時代とともに小刻みに強められる。	些細な問題でかう小刻みに規定を変へられると、些細なことがらだけに一層神経的に疲労させられたものと思はれる。
64	7		いったい彼等の寝泊りする場所や、食事の世話は誰がしたのであろうか。それに組織というほどのことはないにしても、これだけの人数を長期間まとめて統率するには、相当の指導力が必要であろうが、どんな連中が中心になって、それをやっていたのか、そのへんのことは、文助の日記にも、また『土佐藩	当時の高知市内には町人だけで人口一万五、六千、戸数が五千軒ぐらゐだといふから、十軒に一軒の割りで郷士が一人泊つてゐた勘定だが、そんな連中が二十日間も集つて毎日どんなことをやつてゐたのか? そのへんのことは、文助の日記にはまつたく触れられてゐないので、皆目、見当もつけかねるが、

66 6	郷士記録』などにも、全然記述がないので、皆目、見当もつかない。ただ後年、およそ十年後に、勤王党の密盟が結成されるのは、こうした郷士の団結力が基盤になっていることはたしかだろう。 文助の日記は、	〔同上〕
75 13	※1	
77 13	二人はきびしく	〔同上〕
83 2	となっており、これには池田のことには少しも触れず、もっぱら中平忠次郎が山田、益永の二人を相手にたたかい、それに喜久馬も加勢したように述べている。しかし、そんなことより私は、	〔同上〕
83 14	一層	〔同上〕
85 1	自分の弟を介錯する役目を負わされた利正の心痛は想像に余りあるものだ……。	〔同上〕
90 4	※2	※2
100 9	しかも豊信の母は、豊著の正室ではなく、高知の西郊石立村の大工の娘であったといわれている。つまり豊信には、土佐庶民の血液が半分流れているというわけだ。	〔同上〕
102 10	容堂が後に「大政奉還」という破天荒のことを推し進め、ついにそれを達成させたのは、単に時勢に明敏であったというばかりでなく、将軍職という世襲の権威を絶対視しない乾いた眼を持っていたからだと思われる。しかし勿論、容堂は民主主義者でも平等論者でもない。大政奉還をとなえたのは、要するに薩長の武力討幕論をかわすためであって、むしろ実質的に幕藩体制の延命をはかったものだ。だから、それでいて容堂には、武市たち尊攘論の一派の気をひく何ものかがあった。結果から見れば、武市は容堂のために丸めこまれていたといえるであろうが、容堂自身の中に革新的な要素がなければ、武市一派も容堂に近づくわけはなかった。	〔同上〕
102 17	文助もこのとき高知城下に行つてゐたことは、ほぼたしかで、日記に何も記載がないのは、かへつて連日、いろいろの連中と談合を重ねて、昂奮状態にあつたものかと察せられる。 所詮、試通など、あつてもなくてもいいやうなものだつたからであらうか。文助の日記は、	〔ナシ〕
	※1	
	「一体どうしたことか」と、二人はきびしく	
	となつて、やはり「止むを得ず助太刀仕り」などといくらか美化した点があるが、そんなことより私には、	
	いくらか	
	自分の弟の首を斬り落す役目を負はされた利正の心持は、想つただけでも胸がつまるやうだ。	
	※2	
	さうでなければ後に「大政奉還」といふやうな破天荒のことを、仮りに想ひついたとしても、強力にそれを推し進めることは到底出来なかつたはずである。勿論、容堂は民主主義でも平等論者でもない。だから、大政奉還をとなへる一方で、	

104
10

この倫理は、当時としては極くマトモな正論であろう。ただ、これが東洋の口から出たとなると、瑞山門下の郷士たちは片腹痛い想いを禁じ得なかった。

〔同上〕

この論理は、土佐の地元民、とくに郷士たちにとつては、甚だ不快であつただけでなく、一種皮肉な冷笑を浮かべずにはゐられぬやうなものであつたであらう。

しかもそれは以前から東洋を支持してきた者や縁故者や少林塾の弟子たちばかりであつたから、これでは東洋が家中に派閥をつくつてゐるといふ評判が立つたのも仕方がなかつた。

114
15

それは東洋の縁故者や少林塾の弟子など、以前から東洋を支持してきた者ばかりであったから、世間では東洋が家中に派閥をつくり上げたとして、それを「新オコゼ組」と呼んだ。この「新オコゼ組」の呼称は、天保、弘化の頃、藩勘定方馬淵嘉平を中心に藩政改革をめざして威勢を張った革新グループ「オコゼ組」からきている。当時、門閥家が権勢を張っていたなかで、嘉平は低い地位にありながら指導力を発揮したが、禁制の「心学」の講義を行ったという理由で失脚させられ、凄惨な獄死をとげたと伝えられている。私は心学がいかなるものかよく知らないが、要するに嘉平は「天保の改革」を土佐藩内で断行しようとして、前藩主山内豊資などの門閥家にこれをはばまれ、挫折したものであろう。嘉平の投獄と同時に、それにつらなるオコゼ組の連中は、ほとんど一網打尽に捕えられたが、小南五郎右衛門は平井善之丞とともに逮捕を免れ、その数少い生き残りとして、東洋の擡頭するまで容堂の側近として最も信任をうけていたものである……。そうした事情からも、小南五郎右衛門が過酷な処罰にあったのは東洋が自己のライヴァルの失脚を計ったためだという非難の噂が世間に伝わったのは当然であろう。

〔同上〕

115
15

しかし重ねていえば、

しかし、かういふ場合には東洋が長曾我部氏の遺臣の血を引いてゐるといふことも、あらためて人びとの間に微妙な影響をおよぼしたであらう——。東洋が身勝手な、利己的な振舞ひに出るのは、すでに先祖が主君を裏切つてゐるからだ、といふやうな憶説は表立つて言はれることはないにしろ、陰で人の口から口へ伝はりやすかつたに違ひない。しかし重ね

117 9	——ただし、皮肉なことに折角のこの格式改制のころみも東洋の死によって、ほとんど陽の目をみることなく葬り去られてしまうのだが——。	〔同上〕
120 15	吉田東洋の首が、	〔同上〕
125 4	②※3	②※3
129 5	③東洋とその一党をあくどく嘲弄したものは、まだこのほかに、「ない物づくし」、「あり物づくし」、「木綿物大安うり」、「最ふ出ぬもの」、「日本無双　奢落し薬」、「朝顔日記さわ梨」、「チョンがり」、それに狂歌、謎とき、発句など、いまのこっているだけでも数え切れないほどあるが、いずれも東洋の私的な行状を暴露して、その物欲や色欲の強いこと、多額の税金を取り立てて、その金で文武館や自分自身の家屋敷を建てたのを、嫉妬まじりに囃したり貶したりしたものばかりで、尊王攘夷の立場から東洋の佐幕的政策を非難したようなものは一つもない。おそらく当時は、まだ土佐の一般民衆の間には、尊王だの攘夷だのというものは全然知られておらず、したがって東洋の暗殺を勤王党と結びつけることなど、**想いよりもなかった**のであろうか。	〔同上。但し　想いよりもなかった→想ひよりもしなかつた〕
		ていへば、
		〔ナシ〕
		士格の者の首が一つ、
		❷※3
		③東洋の死後、直ちに藩の上層部は総入れ替へになり、執政福岡宮内、深尾弘人以下、参政も、大監察も、吉田派の人たちは一斉に職を追はれた。……福岡宮内は坂本竜馬の実家才谷屋から多額の金を借りてをり、毎年、正月の駄初式のあとで坂本の家へ挨拶に行くといふ間柄であり、また深尾弘人は文助を預り郷士にしたがへて、つまり安岡の家にとつては主家筋に当る人である。かういふ人たちが、東洋の暗殺によつて失脚させられたといふことは、安岡文助や坂本権平にとつては、さぞかし気詰りな心持であつたかと思はれる。とくに深尾弘人は、吉田東洋に依存するところが多かつたためか、東洋の死後、そのトバッチリをうけて頗る不評を買ひ、暫くは門を閉ざして人前へも出なかつたと伝へられる。文助が、さういふ深尾弘人をどのやうに見てゐたかはわからない。しかし少くとも、そのやうなことを日記に書くには忍びない想ひがあつたのではなからうか。／無論、その当時、文助は自分の息子が東洋殺害の刺客の一人であることを承知してゐたかどうか、それを日記の空白な部分から判断することは難しい。おそらく文助は、息子たちが武市瑞山の唱へる尊王思想とやらの影響をうけて、土佐の藩論が勤王一本にまとまらぬことに飽き足りぬ思ひを持つてゐることや、吉田東洋に対して批判的であつたことには、気がついてはゐたであらう。しかし、それで息子の一人が東洋を殺害することになつたといはれても、まさか、と打ち消す気持が強かつたであらう。

130
3

③静照のようなジャーナリスチックな知識人でさえ、坂本が何のために出奔したのか、どうやらこれは「尊王攘夷」とかいう流行病のようなものに取り憑かれたせいらしい、という程度にしかわかっていなかったものであろう。

〔同上〕

これは必ずしも、文助の父親としての情からとは限らない。当時は、まだ一般に、東洋の暗殺を勤王党に結びつけて考へてゐなかつたと思はれるからだ。

③まして一般庶民は、尊王だの攘夷だのといつても、まつたく無関心だつたに違ひない。だから、東洋が殺されて、／「気味のよいめにアイウエオ」／などと囃し立ててても、それは東洋の開港論や勤王党不信論に反撥したからでは勿論なく、もつぱら東洋が多額の税金を取り立ててはその金で文武館だの自身の屋敷だのを建てたりすることを、嫉妬まじりに憎んだまでであらう。それに東洋が死んで勢力をのばしたのは、勤王派よりも旧弊な超保守派であつて、藩の上層部から吉田派が総退陣したあと、入れ換つて執政、参政などの重役についたのは、ほとんど古い門閥家柄を誇る人たちばかりであつた。

⑤しかし、たとひ息子が東洋暗殺に加はつたことに気づいてゐなかつたとしても、単に脱走亡命したといふだけでも、文助はずゐぶん昏惑させられたであらう。／「その頃の脱走と言ふのは、今日囚人が刑務所を破つて脱走する、あんなものではない」と、田中光顕はその回想録のなかで述べてゐる。「もつときびしいものである。脱走した当人ばかりでなく、当時の私共のそれは、本人は勿論のこと、親子兄弟にまで及んで、罰を受けなければならなかつたのである」／光顕の回想録には、ときどき誇張や誤りがあるといはれてゐるが、右のことは誇張でも誤りでもないはずだ。たとへば坂本竜馬が嘉助たちよりも二週間はやく脱藩したことは、すでに述べたが、そのとき竜馬は姉の栄に家蔵の刀を渡した。すると栄は、竜馬の脱藩で坂本家の家族全員が咎められることになるのを憂へて後日、自殺したといふのである。竜馬に刀を渡されたことで、栄がなぜそれほどの責任を感じなければならなかつたものか、私にもよく

131
16

⑤嘉助にしてみれば、それは少しでも父親や身内に迷惑がかからぬようにという心遣いでもあったのであろう。当時、脱走者は藩からどのような扱いを受けたか、それは藩や時代によってマチマチであり、はっきりしたことはわからないが、自身も脱藩者であった田中光顕はその回顧録のなかで、「その頃の脱走と言うのは、今日囚人が刑務所を破って脱走する、あんなものではない。もっときびしいものである。脱走した当人ばかりでなく、当時の私共のそれは、本人は勿論のこと、親子兄弟にまで及んで、罰を受けなければならなかったのである」といっている。光顕の言い方には多少の誇張もあるかもしれない。しかし、たとえば嘉助たちよりも二週間はやく亡命した坂本龍馬の場合、出奔するに当って次姉の栄から家蔵の刀を受け取った。そのとき栄がどういうつもりで龍馬に刀を渡したのか、これはわからないのだが、何にしても栄は弟の脱藩で坂本家の家族全員が咎められることを憂え、責任を感じて自殺し

〔同上〕

134 12 たと伝えられている。たかが刀を一本手渡したぐらいのことを、そんなに思い悩む必要はなさそうにおもわれるが、身内から脱藩者を出した家族の受ける圧迫感は、今日のわれわれの想像以上のものであったわけだろう。

⑤とくに嘉助は、単なる脱藩者という以上に参政殺害の重大な容疑者であり、もしその証拠が上れば、文助自身もおそらく生きてはいられなくなるのではないか。

〔同上〕

135 3 ⑤もし、嘉助の「亡命紀行」のようなものがのこっていれば、これは那須の書簡などを参照しても、どんなに面白かろうと思われるが、そのようなものは全然ない。嘉助ばかりでなく、野市出身の大石団蔵の手紙も一通も出てこないところをみると、野市から山北にかけて、藩庁は相当厳重な警戒網をしいて綿密な捜査をおこなったのであろうか。

〔同上〕

135 8 ⑤道之助は後に述べるように「民権よしや節」などを作っており、文章を書くことは嫌いではなかったはずなのに、手紙一本のこっていないのは、要するに筆不精であったとしか思えない。

〔同上〕

137 14 ⑥※4

141 12 ⑦しかも危険の負担は勤王党が一方的に負わなければならなかったからである。先年東洋と衝突して退職させられていた山内下総は、こんどの政変で執政に返り咲いたが、武市瑞山から、事件関係者の処分は今後どうなるのか、と訊かれて、／彼の拳（東洋暗殺）、忠義に出づるも、下手人丈は許し難きのみ。

⑥※4

〔同上〕

はわからない。しかし何にしても、弟に脱藩の意志があることを知りながら、それを止められなかつたといふだけで、事実、彼女は死ぬほど苦しんだのである。

⑤こんなとき、藩の権力者に何とかとりなしを頼むとすれば、それは文助が預り郷士になつてゐる深尾弘人のところかも知れないが、前にも述べたやうにその深尾弘人が東洋の死去で失脚させられてゐるとあつては、そんなところへノコノコ出掛けて行くだけ藪蛇であらう。

⑤恒之進が江戸へ遊学したときの「人馬帖」や、権馬が京都警備に行つたときの「道中日記」など、かなり分厚いものがのこされてゐるところからみて、覚之助の長崎留学の紀行ぐらゐは当然あつてもよささうなものなのに、それがないのはなぜだらうか？

⑤といふのは、どういふわけか安岡には極端に無口な性癖の者があり、たとへば私の父など、伯父と同じ家で暮しながら、兄弟で言葉をかはすことがまつたくないといつていいくらゐであつた。べつに喧嘩をしてゐるわけでもないのに、二人そろつて何時間でも黙りこくつてゐるのである。それは寡黙などといふ段階を通りこして、まるで彫像が二つ並んでゐるやうな奇妙な眺めであつた。

〔ナシ〕

⑦しかも勤王党はおよそ一年後にこの事件のために

144 13	／とこたえたという。つまりこれは、下手人だけを藩庁に引き渡せば、背後の勤王党には手をつけないというトリヒキであろうが、これに瑞山が何とこたえたか、それはわからない。いずれにしても、それからおよそ一年後に、勤王党はこの暗殺事件のために瑞山以下主だった者が捕えられ、 ※5	※5	※5 うすうすながら感づいてゐたのではなからうか……。
148 3	一応は聞かされていたのでは**なかろうか**。	〔同上。但し　なかろうか。→なからうか……。〕	
148 10	※6	※6	※6
165 12	※7	※7	※7 しかし本当のところ、不穏のタネはそんなところにはなかつた。それはもつと別のところにあつた。文久二年四月八日、
168 9	文久二年四月八日、	〔同上〕	伝はつてゐたのではないか。要するに、土佐での不穏な空気はそのまま住吉陣屋にも流れてをり、それが四月八日の夜には或る切迫した無形の圧力になつて、福富や松下に働きかけ、みすみす眼の前の脱藩者を取り逃がすことになつたのであらう。
171 3	伝わっていたのではないか。	〔同上〕	※8 〔ナシ〕
172 3	※8	※8 〔同上〕	
185 1	吉村は都合があって二十三日の夜、長州藩出入りの貸し船をやとって、それで翌朝伏見に着いた。しかし目指す寺田屋はガランとして人けもないので、ともかく薩摩邸へ様子を見に行ったところ、たちまち邸内に閉じこめられ、そのままれいの福富健次に引き渡されて、五月初旬、船牢で土佐へ送り返されたというわけだ。		
192 7	※9	〔同上〕	※9
193 15	※10	〔同上〕	※10
196 14	※11	〔同上〕	※11
199 13	何の罪咎もないのに腹を切らされたという、あの血糊の臭いのする事件の他に	〔同上〕	何の罪咎もないのに腹を切らされたことしか

199 15	即座に採用されたものとすれば、やはり剣術がかなり出来るものと見込まれたわけであろうが、	〔同上〕
201 4	天誅組の義挙のとき吉野の山中で**吉村や嘉助とは接触は**あったようだが、京都の薩摩邸にいた頃の嘉助と附き合いがあったとは思えない。	〔同上。但し　吉村や嘉助とは接触は→嘉助とはいくらかの触れ合ひは〕
202 15	ムシが好かなかったからであろうか。	〔同上〕
204 11	これを見ると、吉田殺害の計画を瑞山から打ち明けられて、小南五郎右衛門が「それは考えものだ。いったん流血の禍があれば、水戸藩の内輪争いのごとく、血で血を洗う抗争が止め度もなくつづくだろう」といった予言が適中したことになる。	〔同上〕
208 4	また、この「口上覚」には覚之助の名前がないが、文久三年正月に覚之助は「臨時御用」なるものを申しつけられて京都に派遣され、九月に呼び帰される まで、同地で「密事御用」なるものをつとめている。覚之助が上京志願の口上書に署名しなかったのは、そのようなことと関係あるのであろうか。	〔同上〕

即座に採用されたのは、「瑞山年譜」にもあるやうに、東洋を暗殺するなら藩主豊範が参勤交替に出発する四月十二日までにやらなければならぬといふことがあつたからであらう。しかし、いくら日限が切迫してゐるからといつて、剣術の未熟な者を刺客に採用するわけには行かない。ことに東洋は、長剣を用ゐる大石流の剣法をまなんで相当な腕前といはれてゐたから、なほさらである。だから嘉助も当然、剣術はかなり出来るものと見込まれたわけであらうが、天誅組でも土佐の連中とはそれほど深い附き合ひはなかつたが、よくも知らないことを知つたかぶりで話す癖のあつた人らしい。

ムシが好かなかつたからではなからうか……。勿論、気障で脂ッこいからといつて、それだけで殺されるわけがない。たしかに本間の言動にはウサン臭いところがあり、薩、長、土、各藩の利益にそれぞれ反するものもあつたのであらう。しかし、殺されたうへに、その首を竹棹に刺されてさらされる目にあつたのは、本間の立場が坂本より一層孤立してゐたからといふばかりでなく、生理的に憎まれてゐたからでもあらう。

薩摩藩邸内に閉ぢこもつてゐた安岡嘉助も、北畠治房によつて、またこのやうな殺し屋の一人に見做されようとしてゐたのであらうか。

さらに、この「口上覚」に覚之助の名前がないのは、どういふ理由によるものか、これはよくわからないが、同年の暮に覚之助は単身で京都に行き、そこで、吉村寅太郎など天誅組の領袖と連絡をとつた形跡はあるから、おそらく勤王党から何かの役割をあたへられて、そのことに忙しく、安岡のほかの男たちとは別行動をとつてゐたものと思はれる。

217 12	これは異例の出世であった。	〔同上〕	※12 京都御臨事といふのがどういふことなのかは、よくわからない。おそらく前年土佐藩に発せられた京都警固のことなのであらうが、藩主豊範は容堂が江戸から上京してきたのと入れ換りに京都を引き払つて、二月の中旬には土佐へもどつてゐる。してみると、年があらたまつて警固兵も一部交替がおこなはれたのであらうか。いづれにしても「御用相蒙」とあつて覚之助は脱藩ではないから、このやうに隣村の男を家来につれて公然と上京することができたわけだ。しかし京都で覚之助がどんな働きをしたのか、これは書簡一本も残つてゐないので、一切わからない。
218 6	覚之助の「京都御臨事の御用相蒙り」とあるのは、先きに述べた「密事御用」のことであろう。同じ頃、密事御用を命ぜられた土方久光（楠左衛門）は、これについて次のような談話を土佐史談会の席上で述べている。／「私が京都へ出たのは文久三年正月のことで、当時の筆頭執政から間崎哲馬（滄浪）と私に至急出頭せよといってきた。二人とも御密事御用で京都へ差し立てるというのである。御密事御用というのは上は皇族公卿に出入し、また諸藩の有志にも気脈を通じて他藩におくれを取らぬように働けというので、書生としてはまことに名誉なことであった」／つまり、密事御用というのはどうやら京都の公卿の用心棒兼メッセンジャー、及び他藩応接掛輔佐といった役柄であるらしい。土方は、三条実美について「七卿落ち」のときにも長州から**筑前**太宰府までまわり、維新後も宮内省に出仕することになるわけだが、覚之助は**最初に**姉小路公知につき、姉小路卿が死んだあとは徳大寺実則についていたらしい。また、「諸藩の有志にも気脈を通じ」というのだから、薩摩藩邸などに出向くこともあったかと思われる。	〔同上。但し　筑前→築前　最初に→最初は〕	※13
219 15	※13	※13	※13
226 1	※14	※14	※14
232 9	※15	※15	※15
235 7	双璧であり、前に述べたように土佐勤王党とはとくに親しい間柄である。	〔同上〕	双璧である。二人とも勤王派から狙はれる理由は何処にもない。

校異（二）に続く

＊(1)は『安岡章太郎集』第八巻、(2)は単行本『流離譚』上巻、(3)は『新潮』初出「流離譚」をあらわす。

※1

(1) その冒頭に井口村事件と呼ばれる上士と下士との刃傷沙汰が描かれている。／井口村というのは、城下町の西に隣接した小高坂村のさらに西隣りの村で、郭外では城下に最も近い地区だから、江の口村や大川筋と並んで、都市化した郷士や郭中から溢れた上士の家が最も多く集っていたところだ。西北の山岳地帯から流れる鏡川が、高知平野に入ると南北に分れ、本流は郭中の南側を、支流はその北側を流れて江の口川となり、それぞれ高知城の外濠の役を果している。事件はその江の口川が井口・小高坂両村の境界でさらに二つに分れる分流点、どんどんと呼ばれる堰のあたりで起った。／文久元年（一八六一）三月四日、桃の節句は三日であるが、その日は山内家の祝事があるので例年一日繰り下げておこなわれる。小姓組の山田広衛は、その夜、友人の家で節句の酒に招ばれ、茶道方の益永繁斎というのと連れ立って雨のなかを帰る途中、どんどんの傍まできたとき、近くの寺の門前にかかった土橋のたもとで、二人連れの男とぶっつかった。雨の夜道で暗がりでもあり、道幅も狭いところだから、お互いに決して故意に突き当ったわけではないことはわかっていたが、見れば相手は下士であり、しかも元服前とおぼしい少年を連れている。――何だ、軽格の分際で、そう思うと山田は、むらむらと腹が立ち、小声で詫びを言って往き過ぎようとする男を呼びとめた。／「待て、無礼者」／山田は、酒の酔いも手伝って、思う存分その男を罵った。すると、向うも言い返す。そのうちに、双方とも刀を抜いた。山田は江戸の千葉周作道場で修練をつみ、土佐では麻田勘七の門下で師範をつとめるほどだから、剣術には自信がある。弟の次郎八もなかなかの使い手でこれは「巧者の剣」といわれたが、兄の広衛は豪剣で「鬼山田」と上士仲間では怖れられていた。山田は、たちまちのうちに相手の男を斬り伏せた。／斬られたのは中平忠次郎といって小高坂の郷士であり、同伴していた少年宇賀喜久馬はやはり郷士の伜で家は小高坂にあった。中平が斃されたのを見ると、宇賀少年は雨の中を走って、同じく小高坂に住む中平の実兄池田虎之進に急を報らせた。池田が現場に駈けつけてみると、弟は斬り殺されており、相手の山田はこちらに背を向けたまま、どんどんの先きの小川の岸にしゃがみこんで、水を飲んでいた。池田は、／「弟の仇」／と矢庭に、山田を背後から斬りつけた。この初太刀が深手だったので、さすがの山田も立ち上るのがやっとで二、三度、切り結ぶうちに、川の中へ斬り倒された。

(3) その冒頭に／「面白の春雨や引花を散らさぬ程に降れ引ハ、ゝ、時に繁斎老、空の模様が大分持ち直つて来たでは御坐らぬかへ。」「愉快々々。ソコで山田氏、一つ僕の吟声を聞きたまへ。春宵一刻価千金引花有清香、月有陰引。」／と、二人の男がホロ酔ひ機嫌で現れる。文久元年（一八六一）三月四日の夜である。桃の節句は山内家の祝事に当るので、一日繰り下げられることになつてをり、今宵がそれであつた。一人は家中の上士山田広衛、もう一人は茶道方の益永繁斎。二人は知人の家で雛祭の酒に招ばれた帰り途である。高知城（大高坂山）の北側に小高坂山があり、この二つの丘の間に小川が流れてゐるが、二人がその西方の井口村、永福寺といふ寺の前にさしかかつたとき、暗闇のなかから人影があらはれ、おたがひに体をかはす間もなくぶつつかつた。見れば軽格の下士と、元服前の少年の二人連れである。ぶつつかつた男は小声で詫びをいひながら、こそこそと闇の中へ消えようとした。それまで上機嫌に酔つてゐた山田は、気分を損ねて二人を呼びとめた。「無礼者、待て……」、それから心のすむまでこの二人を罵つた。／男は小高坂に住む郷士中平忠次郎、少年は同じく宇賀喜久馬といつた。中平は、散々罵倒されてゐるうちに思はず刀を抜いてゐた。しかし相手の山田広衛は、江戸の千葉道場で修練をつみ、「鬼の山田」と異名をとつた男であつた。中平は、たちまち山田に斬り伏せられた。これを見た少年宇賀は、雨の中を走つて小高坂の中平の実兄池田虎之進に急を報らせた。池田が現場に駈けつけてみると、弟は斬り殺されてをり、相手の山田は川端で水を呑んでゐた。池田は背後から山田を斬りつけてこれを斃した。

※2

(1) 寺田寅彦の著作のなかに井口村事件に関するものが見当らないこと、そして、これは寅彦が事件を知らなかったためではなく、話が陰惨過ぎて書

く気になれなかったのだろうということを述べた。しかし私の想像は、半分は当っていたが半分は間違いであった。じつは寅彦はこの事件について何一つ書き遺していないわけではない。ただ、私のように大急ぎで全集を引っくり返しただけではわからないように書いていた。大正年間、松根東洋城の俳句雑誌に寅彦が無題で書いたコラムのなかに、次のようなものがあることを、或る人から教えられた。／安政時代の土佐の高知での話である。／刃傷事件に坐して、親族立会の上で詰腹を切らされた十九歳の少年の祖母になる人が、愁傷の余りに失心しようとした。／居合せた人が、あわてて其場にあつた鉄瓶の湯をその老媼の口に注ぎ込んだ。／老媼は、その鉄瓶の底を撫で回した掌で、自分の顔をやたらと撫で回したために、顔中一面に真黒い斑点が出来た。／居合せた人々は、さういふ極端な悲惨な事情の下にも、やはりそれを見て笑つたさうである。／寅彦は、これを身内に起ったことだとも、また誰からきいた話だとも述べていない。のみならず、時代も文久元年を安政時代に変えている。そして主題を、いかなる悲劇的な状況の下にも笑いはあるということに絞って、話を出来るだけ抽象的に、感傷主義など私的なものを極力遠避けて語ったものと思われる。しかし読み返してみると、この短文にはやはり肉親の者でなければ窺えない悲痛な感情が文章の底に流れていることがわかるだろう。つまり、寅彦は決して井口村事件に無関心なわけではなかった、しかし事件にまつわる事柄を身内の話として語るには何か憚られるものがあったということであろう。或いは寺田の家では、この事件は不吉なものとして家庭内でもめったに口にすることを許されず、まして世間に口外することは慎しむべきだというのが暗黙の家憲のようになっていたのかもしれない。／ところで、従兄の話では事件当時、喜久馬の年齢が十三歳であったというのに、寅彦の文章では十九歳ということになっている。これはべつに寅彦がデフォルメしたのではなくて、従兄の方が間違っていた。従兄に限らず、土佐の郷土史などでこの事件を扱ったものは大抵、喜久馬を十三歳、兄の利正を十六歳であったとしており、私もその通りに受けとってきたのであるが、考えてみるとこれはいろいろの点でおかしい。話にきくと、切腹の介錯というのは相当に剣術の技倆がなくては出来ないもので、ヘタをすると首を刎ねる拍子に自分の足を斬ってしまったりするという。そうだとすると、数えの十六歳の少年に弟の介錯をさせるというのは、単に残酷であるというより、**技倆的にも無理だろう**。他に適当な人がいないのならばともかく、身内から介錯人を選ぶとすれば、義兄の別役俊蔵だっていいわけだ。しかし、ここでなぜ利正が介錯人に選ばれたかという理由を詮索するのは、私の本意ではない。ただ言っておかなければならないのは、寺田家の戸籍によれば利正はこのとき十六歳ではなくて二十五歳なのである。これなら立派に介錯人のつとまる年齢であろう。では、なぜ十九歳を十三歳、二十五歳を十六歳とするような誤りを生じたのか。おそらくそれは、この事件を世間に流布させた人たちが、その悲劇性を強調しようとするあまりに、主人公たちの年齢を実際よりもずっと若く引き下げてしまったものであろうが、その理由を追求する気持も、私にはない。ただ、多少不思議におもうのは、この単純な誤伝を極く近年まで寺田家の人たちが誰も訂正しようとしなかったことだ。／坂崎紫瀾の小説『汗血千里駒』は、高知新聞連載中から評判を呼び、その単行本は全国的に売れて、当時のベスト・セラーになったらしい。また井口村事件は芝居にも仕組まれて、美少年宇賀喜久馬の悲運は子女の紅涙をしぼったということだ。そんなだから、この事件のことは、土佐では早くから誰でもが知っていたようだ。そんな中で寺田利正は、自分や自分の弟の年齢が六歳から九歳も引き下げられ、その他あることないこと勝手に脚色されて、世間に言い伝えられるのを、どんな心持で聞いていたことだろう。利正は、家の中でも井口村事件について、まったく語らなかったと伝えられる。**けだし、その**無残な想い出は、おそらく心の中で生涯、**疼きつづけていた**のであろう。

(2) 同右。但し　技倆的にも無理だろう→非常識に過ぎるだらうけだし、その→その　疼きつづけていた→疼きつづけた

(3) 本家の平八が死んだ頃から、文助が大勢の仲間を寄せ集めて琴や茶の会をやつたり、自分もよく出掛けて友達の家を泊り歩き、半月ほども家へ戻らなかつたりするのを、地主の生活に倦きた郷士が、次第に町のご隠居さんのやうな暮らしをはじめたものかと思ひ、一方、息子の覚之助や嘉助が武市瑞山などの影響をうけて過激な尊王思想を持ちだしたのを見て、両者の間に今日でいふジェネレーション・ギャップを生じたのではないかと考へた。しかし私の想像は、半分は当つてゐたが半分は間違つてゐたやう

だ。郷士が自分の土地をはなれて、都市の消費階級である上士の生活に接近して行く傾向はたしかにあつたとしても、そのために文助と息子たちとの世代に断絶感を生じたと考へるのは、私の思ひ過ごしであつた。……だいたい私がそんなことを考へたのは、当時の勤王をマルクスと置き換へて連想したせゐである。たしかに、どちらも社会変革のイデオロギーであるから、息子たちがさういふ新思想を振りまはして過激な行動に走ると、親父は家の中でおろおろしなければならなかつたであらう。ただ、勤王はマルクスと違つて土着の思想であり、幕府といへども勤王そのものに反対は出来なかつたのだから、何処の親父も息子の尊王を抑へるわけには行かなかつた。ところで土佐では、何度もいふやうに、山内氏が前任地遠州掛川から連れてきた家中の上士（掛川衆）と地元民との間に何の交流もなかつたから、誰もが心情的には反幕府、反藩政であつて、とくに郷士の家では尊王思想のために親子が心底から離反することなど、有り得なかつただらう。

※3

(1) じつは、その夜、東洋を襲った刺客は、那須信吾、大石団蔵、および安岡嘉助の三人である。嘉助がどうしてこの刺客団の一員に加わったか、その間の事情はよくわからないが、それはまた後に述べるとして、そのまえに先ず東洋殺害の現場と刺客団の行動を知るために、那須信吾が養父那須俊平に宛てた十月七日づけの手紙を引用しておこう。／……何分此頃ノ時勢、其上大奸物、旁々以テ元吉（東洋）ヲ退役致サセ**申シ候ラハズテハ**、勤王ノ事行ハレマジクト申ス事ニ至リ候。止ムヲ得ザレバ刺シ除クベキナレドモ、成ルダケハ平穏ニ退役致サセ候ヘバ、静謐ニ事足リ候トテ、大学様、雅楽之助（兵之助）様、民部様、其ノ外、御家老中、頻リニ御世話遊バサレ候ヘドモ御力ニ及ビ申サズ、遂ニ四月朔日ヨリ、イヨイヨ（東洋を）刺スニ極リ、同志ノ者ドモ毎夜毎夜、場合ヲ伺ヒ候処、既（遂？）ニ八日夜、機会ヲ得、ナホマタ同志ドモ能ク能ク盟ヲナシ、ソノウチ首請ケ取リ獄門ニ掛ケ且ツ私ドモノ荷物ヲ持チ候者ドモ十人バカリ、四半橋（思案橋）観音堂ヘ廻シ置キ候。／扨、モハヤ夜半前、登城ノ帰リヲ私ドモ帯屋町ニテ待チ受ケ、先ヅ私、後ヨリ（東洋の）首ヲ見込ミ、唯一ト打チト思ヒ刀ヲ下シ候処、傘ニ障リ、浅手ニテ彼ノ者（東洋）直チニ見返リ、抜キ合セ、聊カ斬リ合ヒ候処ヲ、外方ヨリ段々手ヲ下スヤ否ヤ斬リ伏セ、直チニ私、首ヲ取リ候ウチ、余ハ観音堂ヘ引キ取リ、私、（東洋の）首ト刀ヲ側ノ小溝ニテ洗ヒ、用意ノ下帯ニ包ミ提ゲ、唯一人、帯屋町ヨリ南奉公人町ヲ通リ、西ヘ参リ候処、毎々犬ニ吠エラレ、既ニ首ニ喰ヒ下リ申スベキホド近寄リ、大ニ迷惑仕リ候ヘドモ、如何様無難ニ観音堂ヘ持チ付ケ、同志ニ相渡シ、安堵仕リ候。夫レヨリ寛々、荷物手槍等ヲ受ケ取リ、旅支度取リ調ヘ、暗夜ナガラ一同懇ニ暇乞ヒシ、且マタ京師ニ於テ機会ヲ待ツテ死ヲ共ニスベキ事ヲ約シ、西ニ向ヒ候処、今コソハ父母ノ国ヲ去ルノ期ナリ、マタ再ビ生キテ帰ル事モ覚束ナシト思ヒ、窃カニ涙ヲ拭ヒ、大石団蔵、安岡嘉助ト三人、シホシホト暗地ヲ歩ミ行ク。（以下略）／那須にはもう一通、翌文久三年正月二十九日づけで実兄浜田金治宛ての手紙があり、脱走後のことはこの方に詳細に述べられているが、要するに東洋暗殺の現場報告としてはこの二通の手紙が「唯一無二の真史料」であると『**維新土佐勤王史**』はいっている。ところで、

(2) 同右。但し　申シ候ラハズテハ→申サズ候ヒテハ

『維新土佐勤王史』は→『維新土佐勤王史』も

(3) ……何分此の時勢、其上大奸物、旁々以つて、元吉（東洋）を退役致させ申さず候ては、勤王の事行はれ間敷と申す事に至り候。（中略）彼の巨魁、四月朔日よりいよいよ刺し候に決定仕り、其後毎夜、隠兵を以て探索仕り、やうやく八日夜、機会を得、なほまた同志とも能く能く盟をなし、そのうち首領受け取り梟首致し候者、及び私共の手道具を持ち候者、十人許り、四半橋、観音堂前の川端へまはし置き、もはや夜半前、登城の帰りを私共と八人待ち受け、先づ私、件（東洋）の右側より後へ踏み込み、首を見込み、左の肩より唯一と打ちと思ひ、刀を下し候処、傘に障り、但しは手凝り候か、浅手にて、件、直ちに見返り、抜き合せ、六七遍切り合ひ候処を、外方より段々手を下すや否や切り伏せ、直ちに私たち寄り、俯(あはむ)けに斃れ候を刀にて首を打ち候処、首筋より腮へかけ余程切り難く、屢々拝み打ちに仕り候うち、余は観音堂へ引き取り候。漸く首ををあげ、血刀、首級とも側への小溝にて洗ひ、用意の下帯に包み提げ、南奉公人町通り、彼の地へ駈けつけ、其手の者へ首を渡し候ところ、向うへまはり居り候者

ども、余程周章の体にて候。夫より荷物、手槍抔、受け取り、寛々旅支度相調へ、安岡嘉助、大石団蔵、都合三人、途に臨み、伊野に至り渡しを呼び、釈迦参りの帰りがけと謀計をめぐらして渡り、加茂にて東雲に相成り、六社前提にてなほ委しく血痕をあらため除き、（後略）……。（「俯け」に「あほむけ」とルビのあるのは原文のママ。）／これは那須信吾が、十月十七日付――つまり事件の半年あまり後――亡命先からその実兄に宛てた手紙で、吉田東洋殺害の現場をつたへるほとんど唯一の史料として知られるものだが、

※4

(1) じつは武市瑞山の背後には、連枝、山内大学（容堂の父豊著の弟）、山内兵之助（豊著の三男、容堂の弟）、山内民部（豊著の五男、容堂の弟）などがあり、さらに彼等の背後には現藩主豊範の実父豊資（景翁）がいて、門閥派の家老、桐間蔵人、山内下総、柴田備後、深尾丹波などとともに全員が革新派の吉田東洋と対立していた。彼等は最初、景翁を動かし、その威光で東洋を藩庁から退けようと計ったが、東洋の権力が牢乎として強いうえに、東洋を支持している容堂の実力もいまは景翁を**遥か**に上廻っていて、かつてのように景翁の一存で藩政の人事を左右するわけにはいかない。そこで武市は、これらの門閥保守派と密約を結んで、輩下の刺客を東洋に向けることにしたものである。その間の事情を、山内民部の側近生原重周は、後年の覚書で次のように述べている。／文久二年ノ頃、予ガ山内民部公子ノ近習ヲ勤メシ頃、執政吉田元吉（東洋）大イニ改革ヲ行ヒ、国政ヲ左右スルコト意ノ如ク、権威一人ニ帰シ、衆皆、畏懼セザルハナシ。此時ニ当ツテ武市先生、京師ヨリ帰リ、始メテ尊攘ノ説ヲ唱ヘ、慷慨悲憤、同士ヲ募リ、吾藩ノ薩長ノ義挙ニ後レンコトヲ憂ヒ、屢々政府ニ説クモ容レラレズ。執政吉田元吉、佐幕論ヲ唱ヘ、君側ニ在ルヲ以テ如何トモ為スアタハズ。千辛万苦、止ムヲ得ズ斬奸ヲ行ヒ、国是ヲ一定シテ、他日大イニ義兵ヲ挙ゲンコトヲ窃カニ正義ノ士ニ謀ル。ココニ山内兵之助、同民部、両公子ハ正義ニシテ、殊ニ民部公子ハ頗ル英邁ノ聞エアリ、当時ノ権臣ヲ**厭フト**。岩崎馬之助（兵之助の個人教授）、公子ニ説ク。同公子ヨリ之ヲ民部公子ニ告グ。公子、大イニ武市先生ノ意ヲ賛シ、共ニ奸臣ヲ攘ハンコトヲ勉ム。一日、武市先生、予ガ家ニ来リテ曰ク、「時、大イニ迫ル。薩長、夙ニ勤王ヲ唱ヘ、遂ニ討幕ノ論、既ニ決ス。吾藩、時機失スベカラズ。然リト雖モ、奸物、君側ヲ擁シ、吾言、固ヨリ容レラレズ。却ツテ禍害ノ吾党ニ及バンコト必セリ。故ニ止ムコトヲ得ズ、事ハ斬奸ニ決ス。君、今民部公子ノ許ニ勤ム、宜シク努力スベシ」ト。予、コレヲ諾シ、感慨、死ヲ以テ誓フ。翌日、東邸（民部の邸）ニ赴キ、窃カニ公子ニ説ク。（以下略）／この覚書は、明治二十年になって書かれたものだから、細部には多少の思い違いもあるし、民部を何かと庇い立てしたところもあるようだ。岩崎英重編の武市瑞山年譜によれば、民部は吉田東洋の排除に頗る積極的で、藩主豊範の参覲交代出発予定日、四月十二日までには是非とも決行しなければならないとして、瑞山に「まだか」と、計画の実行をうながした模様である。しかし、東洋が暗殺され、その首が雁切河原にさらされると、民部をはじめ連枝の諸公子は急に態度があらたまって、冷然としはじめたようだ。／藩内は無論、上を下への大騒ぎで、直ちに犯人追跡の探索者が四方に派遣され、厳重な聞き込みがはじまった。藩重役が全員吉田派なのだから、これは当然の措置だろう。しかるに、そうした動きを見ながら、民部その他の連枝たちは、素知らぬふりで何一つ口をはさむでもない。武市瑞山以下、一党の面々にしてみれば、甚だ心許ない状況に追いこまれることになった。いくら連枝との密約があっても、証拠は何もないのだから、シラを切られてしまえばそれまでである。やがて、瑞山一派の勤王党が全員逮捕されるだろうという噂がひろまった。こうなると、郷士たちもジッとしてはいられない。数十人が武市の細君の弟、島村寿太郎の家に集って、庭にボンベンと称する大砲を据えつけ、「このまま逮捕されるぐらいなら、藩役人と一戦をまじえ、生き残った者は全員で集団脱走しよう」と気勢を上げる。／翌十日になっても、藩重役の入れ換えはおこなわれず、連枝は相変らず邸内に閉じこもったままである。夜になって、ついに瑞山は、一体どうしてくれるのか、という手紙を民部の邸に送った。その返辞は翌日（十一日）になって、瑞山のもとに届いた。／一、只今、一等（**統**）必死を相極め、刃傷にも相成り候勢の由。然るに、いま取手（捕吏）参り候とも、まづ心静かに縛に就き、相待ち候へば、直ちに刑儀定まり候訳ニモこれ有るまじく、又、我々きつと力を尽し、一時に打

ち潰し申すべき二相定め候間、先づ左様相心得候が至極忠義二相当り候かと存じ候。／四月十一日　民部／これを見ると、勤王党の全員逮捕の噂は、根も葉もないものではなくて、藩庁には実際にそのような動きがあったものと察せられる。民部はこの後、叔父の山内大学と兄兵之助、家老の山内下総、それに深尾丹波などを邸内に集めて、ようやく藩庁から親吉田派を一掃する作戦に乗り出したようだ。おそらく瑞山からの催促がなければ、藩庁重役の総入れ換えなど早急に行う意志はなかったものかと思われる。しかし、郷士が同志を糾合するなど、事態は思いのほか切迫しており、また上士園村新作が藩主に重臣の交代を直諫したりしたこともあって、その夜、急遽、重役の総改替がおこなわれた。すなわち、執政福岡宮内、深尾弘人以下、大監察の福岡藤次（孝弟）や市原八郎左衛門、藩主豊範の側用役の神山左多衛、近習目附の後藤象二郎など、家老から少林塾子飼いの弟子にいたるまで、藩庁の要職を占めていた吉田派の全員が免職になり、これに代って柴田備後、山内下総、桐間蔵人などの歴代家老が執政に登場し、以下旧弊な門閥派が参政その他の重役に就任、旧オコゼ組の生き残り平井善之丞と小南五郎右衛門は大監察に任命された。／こうして、藩庁から吉田派の勢力が一掃されたために、瑞山一派の勤王党は逮捕の手を免れることができた。しかし、この新政権は一応、門閥保守派と勤王党の連立政権のようにもみなされたが、そのじつ勤王党を支持する者は平井と小南の二人だけで、他はことごとく門閥家であり、実権は当然、彼等保守派ににぎられていた。

(2)　同右。但し　遥か→遙か　厭フト。→厭フト、　統→党

※5

(1)　手近かな例は、武市瑞山が吉田東洋を暗殺するに当って藩上層部にはたらきかけ、これと密約を結んでいたことであるが、果してそれがどんな密約であったのか、また瑞山にはどういう目算があって、そのような行動に踏み切ったのかということになると、確かなところは皆目わからない。／武市が「一藩勤王」を唱え、個々人が脱藩して尊攘運動に走ることに反対したのはよく知られているとおりで、おそらくその意見は正しかった。幕藩体制がつづいている限り、個々人が自己の主張をつらぬくために脱藩しても、それはほとんど何の力にもならない。例外は坂本龍馬が再三脱藩を繰り返しながら薩長連合の締結に成功したことぐらいであろう。だが、その坂本も、最後には後藤象二郎に近づいて藩に戻った。そうしなければ、配下の亀山社中を藩所属の海援隊に編成することも、後藤に協力して大政奉還をすすめることも出来なかったからである。まして、財力もなく才覚も乏しい一般の脱藩士が、ただ情熱に駆られて京都などへ上ってきても、国許から持ち出した金を費い果すと、ほとんど浮浪者のような生活を余儀なくされるだけであった。しかし、武市が藩論を勤王一本にまとめるために吉田東洋を斬ることに決断したのは正しかったか？　何でも事前に相談をうけた小南五郎右衛門は、これに反対して、「いったん流血の禍を見れば、水戸藩のように血で血を洗う内紛を繰り返すことになる」と言ったと伝えられる。それは、そのとおりであろう。しかも、吉田を斬るために山内豊資以下の門閥保守派と連繋したのは、最も危険なことであった。吉田を仆すことで、どうして旧弊固陋な門閥家を勤王に変えさせることが出来るか。藩論を勤王にまとめるためには、江戸にいる山内容堂を動かすしかない。そして吉田は、容堂の寵臣であり、豊資は容堂が臨時雇いのかたちで藩主の地位についたとき以来、容堂にとっては目の上のコブであった。その豊資ばかりでなく、容堂の叔父の山内大学、実弟である山内兵之助、山内民部まで取りこんで、共謀の上で吉田を殺したとあっては、容堂と勤王党の間が決定的にマズくなるのは、誰が考えても明らかであろう。武市にしても、そのことに気がついていなかったとは思えない。／にも拘らず、武市がこの危険な策謀をあえて行ったのは、一つには容堂の実力を過少に見ていたためであろう。容堂が将軍継承問題に連坐して品川の藩邸に謹慎を命じられていたことはすでに述べたとおりだが、その謹慎がこの時機にはまだ解けていなかった。それが正式に許されるのは四月二十五日、すなわち吉田が殺されて二週間余りもたってからである。したがって武市は、容堂が謹慎中の身分であるうえに、股肱とたのむ吉田を失えば、手脚をもがれたも同然であるから、無視しても左程の影響力はない、むしろ今後は吉田に代って自分が容堂を操作することが出来るぐらいに考えていたのかもしれない。しかしそれ以上に、武市をこの賭けに踏み切らせた大きな理由は、何といっても薩摩の島津久光の率兵上京が迫っているという噂

がしきりに聞えてきたことであろう。／勿論、それは単なる噂ではない。安政五年、前藩主島津斉彬の時代から、藩主が新式訓練をへた薩摩の大軍をひきいて上京し、朝廷に強要して幕府に政策改革の勅書を出させようというクーデター計画があったが、斉彬の急死でそれは実現にいたらなかった。そして兄斉彬の遺志を引きついだ久光は、この年、文久二年の正月、江戸で安藤老中が尊攘派に襲われて負傷した頃から、しきりに率兵上京の動きをみせていた。その機に乗じて武市もまた、参覲に上る藩主豊範の行列を江戸でなく京都に向わせ、一行に自分も加わって、薩長の尊攘派と協力しながら、一挙に土佐の藩論を勤王に持って行こうというのである。／そんな武市の腹の内を、那須信吾、大石団蔵、安岡嘉助の三人は、どの程度知っていたか、これはわからない。しかし、大石団蔵は前年、武市の指令で山本喜三之進とともに、長州、薩摩の探索に出掛けており（もっとも薩摩には入国できず、佐土原を廻って帰ってきたが）、これは久光率兵の情報をさぐりに行ったはずだから、武市の意図もかなり良く知っていたに違いない。また、那須の養父俊平にあてた手紙に、「大学様、雅楽之助様、民部様」と連枝の名を上げて、これらの人が何とか吉田を退役させようと図ったことを述べているのは、吉田の暗殺計画にもこうした藩上層部が加担していることを暗に語ったものかとも思われる。／そうだとすれば、那須、大石、嘉助の三人が、伊予の岩川まで三十里もの道を、それも四国山脈の山岳地帯にかかる嶮岨な山道を、時速八キロという驚異的な速さで踏破したのは、必ずしも彼等が恐怖に追われていたためとは言えないかもしれない。那須が実兄浜田金治に宛てた手紙を読むと、

(2) 同右。但し　であった。→であつた……。言った→いつた

(3) はやい話が、武市瑞山はどういふ目算があつて吉田東洋の殺害に踏み切つたのか？　結局のところそれはよくわからないのだが、「維新土佐勤王史」によると、瑞山は小南五郎右衛門など上士のなかの勤王派には、東洋暗殺の可否についてかなり立ち入つた相談を持ちかけてゐるし、藩の上層部の反吉田派とも事前に或る程度の了承をとりつけてゐたやうだ。しかし、反吉田派といふのは大部分が門閥家の保守派で、いひかへれば先々々代藩主で隠居のまま頑強に生きつづけてゐる山内豊資一派だから、白札郷士で天皇好きの瑞山のことなど最初から問題にしてゐない。憎い東洋がゐなくなればそれでいいのである。果せる哉、東洋が死んでしまふと彼等は、武市一派がどうならうとかまふことはない、しばらく放つてをいて様子を見ようといふ態度に出た。瑞山配下の勤王党にしてみれば、こんなに不安なことはない。このぶんでは必ず藩庁は不意に勤王党の全員を逮捕しにくるに違ひない、それならいつそ集団脱走して皆で京都に上らう、とか、ただちに蹶起して吉田の残党をみなごろしにしたうへで全員切腹しようとか、一斉にそんなことを言ひはじめる。また或る郷士の家には数十人の同志が集つて、庭にボンベンと称する旧式の大砲を引き出し、轟然一発を合図に全員蜂起を誓ふといふ騒ぎである。瑞山は、この有様を容堂の実弟で勤王党のシンパイザーである山内民部に手紙で報告したので、驚いた民部は藩にはたらきかけて、やうやく上層部から吉田派の勢力が一掃された。もつとも、さうして入れ換つた上層部の大多数が門閥保守派で、勤王派はほとんどゐなかつたことは、すでに述べたとほりだ。執政には、前年に東洋と衝突して退職した山内下総が返り咲いたが、その下総は瑞山からの使者に、／「彼の拳（東洋暗殺）、忠義に出づるも、下手人だけは赦し難きのみ」／と伝へたといふ。つまりこれは、下手人だけを藩庁に引き渡せば、背後の勤王党には手をつけないといふトリヒキであらうが、瑞山がこれに何とこたへたか、それはわからない。／ところで、その下手人、那須信吾、大石団蔵、安岡嘉助の三人は、東洋の首を仲間の河野万寿弥たちに手渡すと、手槍や弁当などを受け取つて、夜半の路を高知からほぼ真つ直ぐ西に向つて駆け出した。彼等が伊予の岩川まで、三十里もの道――それも四国山脈の山岳地帯にかかる山道――を、およそ十五六時間といふ驚異的な速さで踏破したことは前にも述べたが、この速さを追はれる者の恐怖のせゐのやうに考へたのは、どうやら私の思ひ違へで、

※6

(1) それは那須の手紙を見れば明らかである。養父宛てのものも、実兄宛てのものも、東洋殺害の模様を報告した部分は、細部に些少の違いがあるだけで内容はほとんど同様であるが、どちらも東洋を斬り伏せたあと、直ちに駈け寄って、その首を切り取ったとある。ただ、養父宛ての手紙では、／直チニ私、首ヲ取リ候ウチ、余ハ観音堂へ引キ取リ／と、あっさり片附

けたところを、実兄宛ての手紙では、もう少し詳しく次のように述べている。／直チニ私、（東洋の遺体に）立ち寄り、俯けニ斃れ候を刀ニテ首を打ち候所、首筋より腮江掛り余程切レにくく、屢々拝ミ打ちニ仕り候うち、余ハ観音堂ニ引き取り候。（私は）やうやく首を揚ゲ、血刀、首級とも側の小溝ニテ洗イ、用意の古下帯ニ包み下げ、南奉公人町通り、彼ノ地江駈ケ付ケ、其の手の者江首を渡し候所、向江廻り居り候者ども、余程周章の体ニテ候。／養父に宛てた手紙には、首を下げて夜道を歩いている途中、犬に吠えつかれ、すんでのことに首を犬に喰いつかれそうになって大いに迷惑したなどという件があったが、実兄宛ての手紙にはそれはなく、そのかわりに首を切断するのに苦労したということや、その首を観音堂で待っていた仲間の連中に渡してやると、彼等はびっくり仰天したようだ、といささか得意げに書いている。待ち受けていた河野万寿弥たちが、東洋の首を見て余程周章の体であったというのは、或いは東洋を殺すことは予定になかったのかという気もするが、切り取った首を「用意の**古下帯ニ**包み提げ」ということは、養父あての手紙にも述べてあり、

(2) 同右。但し　古下帯ニ→下帯に

(3) それは那須がのちに養父俊平に当てた手紙で明らかである。すなはち、東洋を斬り伏せたあと、／直ちに私、首を取り候うち、余は観音堂へ引き取り、私、首と刀を側の小溝に洗ひ、用意の下帯に包み提げ、唯一人、帯屋町より南奉公人通り西へ参り候処、毎々犬に吠えられ、既に首に喰ひ下り申すべくほど近寄り、大いに迷惑仕り候へども、如何様不難に観音堂へ持ち付け（下略）／これは前に引用した那須が実兄に当てた手紙と日付けも同じ文久二年十月十七日で、二通の手紙を同時に書いたものと思はれる。したがつて吉田東洋殺害の模様を報告した部分は、細部に些少の違ひがあるだけで、内容はほとんど同様のものだが、実兄宛ての手紙では、東洋の首を切断するのになかなか苦労したやうに書いてあるのに、こちらは単に「直ちに私、首を取り」となつてゐる、またその首を提げて観音堂へ向ふ途中、犬に吠えつかれ、すんでのことに首を犬に喰ひつかれさうになつたなどといふ件りは、実兄宛ての手紙にはない。しかし切り取つた首を「用意の下帯に包み提げ」といふところは両者共通してをり、

※7

(1) 住吉陣屋に赴いてからも警備勤務の合間勉強していたらしく、文久元年五月二十八日づけで弟嘉助にあてて、次のような手紙を書いている。／大暑之節、いよいよ御無事ニ御暮しなさるべく**珍重ニ**存じ候。ついで拙も、恙なく在勤致し候間、左様ニ御休意ならるべく候。／御陣家も文学課程、しかと相立ち申さず候につき、稽古も未ダはじまり申さず。槍剣ハ申し合せニテ始り候へども、此間の穏便ニつき、しばらく相休ミ申し候。／仲間の内ニも間崎琢一郎（滄浪の従兄）、桑原助馬、松岡善蔵、清岡道之助など申して読書家これあり候間、稽古はじまり候へバ、随分修行ニも相成り申すべく候。書物ハ何かと仕入れニ相成り候へども、未ダ拝借ハ出来申さず候。追々ハ出来申すべく候由なれども、いづれ人数多き故、人々の□江拝借致し候ことハ如何か、しかとは分り申さず候。右ニつき、是非書物□□事足り申さず候。河内屋へ過日、温史注文致し候。／はたまた廿四日の夜より彗星、亥ノ北ニ当り相見え申し候。誠ニ天帝の人間ニ御示しなされ候ハ、深切至極ニ候へども、常並のやうに思ひ、誰ありて真実心ニ懸け候人はこれなく、すでに過日も崎陽江修行ニ参り候人の帰りての咄ニ、対州ニ夷人あらはれ州人を殺し、右ニつき肥前侯、柳川侯、加勢として御人数指し出し候。□常府江御届ニ相成り候由、あらあら承り申し候。／道詠の説、信□なりがたく候へども、これらの事を思ひ合セバ、皇国の形勢薄氷を踏むの心地、かかる時勢ニ生れ合して、およそ丈夫なれバ豈禄々として歳月を空しうすべけん哉。実ニ憤発興起の時節ニ候。先づハ別条御座なく候へども、右ばかり日頃の安否伺ひかたがた、かくの如くに御座候。別事、重便を期し候。／恐々謹言／覚之助／五月廿八日／嘉助殿／二白、公文百馬□の書物を求め候へバ、世話申すべく候。左伝ハ如何に候や、御問ひ合せ下されたく候。実ハ只今求め置き、帰国の節、持返り候へバ、そのうち道之助など読むニ都合よろしく候間、左様承知なさるべく候。／五月二十八日といえば、住吉陣屋の落成から、まだ一と月とたっていない。したがって、文学（学課）のスケジュールも出来ておらず、授業もまだ始っていなかったわけだろう。無論、陣屋は学校ではない。外敵にそなえて大坂湾岸の警備にあたるところである。しかし、この手紙で見る限り覚之助は、まるで旧制高校の新入生が後輩である弟に寮生活の様子で

もきかせてやっているような、そんな昂揚した気分が感じられるではないか。

(2) 同右。但し　珍重→珍宝

(3) 大阪警備に応募したのも、要するに田舎の土佐でくすぶってゐる気にはなれなかつたからであらう。

※8

(1) 那須、大石、嘉助の三人が住吉陣屋に近づいて、陣屋の中にいる同志と連絡をつけたときの模様はどうだったのか――。しかし、その前に、四月十四日と同月二十六日づけで、覚之助から父の文助にあてた手紙が二通あるから、先ずそれを見ておこう。文面には、当時の物情騒然とした様子や陣屋内の緊張した空気も、自然に滲み出ていると思われるからである。／大取急ニつき、前文これを略す。然らバ（陣屋勤務）交代の人も段々蒙り、嘉助も蒙り候趣き、過日、畠中より書附を廻し候ニつき、遠からざるうち交代と、孰れも相楽しみ居り候場合、一と通りならざる大事出来。いまだ起らざること故、如何なるものかハ分らず候へども、事情を探り候へバなかなか唯事ニテハ有るまじく、定めし此節ハ御国元江も速かに聞え候ことと存じ奉り候。尚、委細書附ハ嘉助が状ニ封じ候につき、御覧ならるべく候。／何ヲ申しテも御陣家ニテハなんにも策ハ御座なく候。勿論、大坂城代などより援兵を乞ひ候とも、これは決して援、服さざるニテハこれなく、先づまづ傍観致し候ほかニこれ無し。／過日、御国及ビ京、江戸へ早飛脚立ち候こと故、多分大騒ぎのことと存じ奉り候。その日ハ私儀、晦日ニテ他出、帰りて右の様子うけたまはり、大いニ驚き申し候。しかし決して御気遣ひの儀ハこれなく、大愉快の事ニテ御座候。この度こそゲヘーエール（ゲヴェール銃）得し船を入れ候かと相楽しミ居り申し候。何かと申し上げたく候へども、大取紛れニつき、右まで申し上げ候、尚後便ニ委細申し上ぐべく存じ候。／四月十四日　覚之助拝／大人様膝下／私は最初この手紙を見たとき、「一と通りならざる大事出来」というのは吉田東洋殺害のことかと思った。しかし、四月八日の夜半に高知城下で起った事件が十四日までに住吉陣屋に伝わることは、途中をどんなに急いだにしても、まず有り得ない。それに「尚、（事件について）委細書附ハ嘉助が状ニ封じ候」とあるからには、覚之助がこの手紙を書いているときには、まだ吉田刺殺のことは全然知らず、まして嘉助がその刺客の一人であることなど、まったく想像もしてなかったにちがいない。／だいたい、嘉助を武市瑞山のところへ行かせたのは覚之助であった。前年九月、武市は江戸からの帰途、住吉陣屋に覚之助を訪ね、勤王党オルグのための勧誘をしていったらしい。そのときの覚之助はよほど昂奮した模様で、早速、次のような手紙を嘉助にあてて送っている。／……半平太（武市）の人となり、兼て承知には候へども、これほどの好男子とは存じもよらず、この度びの義憤、古の文山先生ニも恥ぢざるの意気込ミ、この上はつとめて士心を鼓舞致し、壱人ニテも同志の勢こしらへ候やう、実ニ身命を抛つて処々奔走致し、神州を補繕する丹心、感ずべし〳〵。必々、（高知へ）出府致し、（瑞山を）御訪ね、時勢御聴き下さるべく候。若し参り候ときハ、此方も懇に尋ねくれ候一礼、御述べ下さるべく候。この先生の腸ハ仲々大く、たのもし〳〵。先づハ右ばかり、匆々、あなかしこ。／九月廿六日夜　覚之助／嘉助殿／こうした文面を見ていると、覚之助は嘉助に対して普通の兄弟という以上の、同志愛のようなものを持っていたようにも思われる。その嘉助が近々、陣屋勤務の交代要員として住吉へやってくるというので、覚之助はもっぱらその日のくるのを楽しみにしていたところ、一大事が持ち上って勤務交代どころではない騒ぎになったというわけだ。ところで、この「大事」というのが東洋の暗殺でないとすれば何だろう。それはやはり「伏見義挙」のことにちがいない。／すでに述べたように、久光の率兵上京の情報は、先ず二月八日に住吉へやってきた坂本龍馬から、覚之助は望月清平とともに聴かされている。そして四月八日には、吉村虎太郎が本間精一郎を連れて陣屋にあらわれ、久光の上京に合せて薩長両藩その他の尊攘派志士たちの蜂起があることを予告している。このとき本間が伝えたことはかなり具体的なもので、／来ル四月十一日マデニハ、薩公御実父島津和泉（久光）君、大坂マデ蒸気船ニテ参ラレ、ソレヨリ伏見ニテ諸国勤王ノ兵ヲ一両日待チ合ハセ、京都ヘ駆（馳）セ上リ、諸司代ヲ押シ潰シ、勤王ノ勅旨ヲ申シ請ケ、諸侯ヘ激文ヲ廻シ、追々諸豪勇相集リ候上、今上天皇ヲ奉ジ、関東マデ押シ通リ候存慮ニ候……。／というのであった。この本間の言葉を、**松下与膳**以下、応対に出た連中はどのようにきいたか。お

そらく半信半疑というよりは、何かキツネにつままれて幻聴を吹きこまれているような心持であったかもしれない。しかし久光は、たしかに本間の言ったとおり、家老浦監物以下薩摩の大部隊を引き連れて蒸気船に乗ってやって来た。それも本間の予告より一日早く四月十日に大坂に上陸したのである。ここにいたって、松下をはじめ陣屋の幹部連中は漸く愕然となったものであろう。急遽、心当りの各所へ斥候や探索者を出して、本間のいう「義挙」が果して行われるものかどうかを調べさせた。覚之助も、望月清平と二人で薩藩邸近辺の探索を命じられて、十一、十二、十三、と連日、聞き込みにまわった模様である。文助にあてた十四日づけの手紙は、そうした忙しい日々の合い間に書かれたものであろう。／しかし、この「義挙」は、四月二十三日夜、伏見の寺田屋に薩摩の尊攘派をはじめ、田中河内介、真木和泉などが集って、九条関白邸の襲撃などを画策している最中、島津久光の派遣した「上意打ち」の鎮使によって、首謀者九人が刺殺され、一挙に潰滅させられたことは周知の通りである。覚之助の二十六日づけの手紙は、そのへんのことを次のように述べている。／（前略）然らば、薩長の義兵、かねがね急血に相成り、去ル廿三日、かねて御国ヨリ亡命致し候吉村虎（虎）太郎ヨリ陣家内江書状よこし候処、今夜暴発致し候間、諸藩ニ後れぬやう御用意ならるべくと申し越し、（陣屋より）すぐさま大坂江様子見せニつかはし候処、固より吉村なども上京、長州（藩邸）内ニハ侍分の者壱人も居り申さず、皆々上京の由。兵庫の陣屋よりも大勢着坂、すぐさま上京の支度。薩も同様。その日、堺江着船ニテ住吉往還ヲ通り候人も百四五十人もこれ有り、段々陣屋の人も見申し候。其夜も夥しく淀船ニ乗り候支度ニテ、槍など持ち運び、固より薩人ヨリ承り候ハバ、至極正大の論ニテ仲々火急ニ事ヲ起し候様ニテハこれなく候へども、何分右の如く、今夜事ヲ発し候など申すハ、矢張り浪士の虚喝。尤モ長、薩の存慮の通り、幕府より天朝ヲ幾重にも尊敬奉り、きつと君臣の義相立て、皇（公）武御合体に相成り、これ迄の御暴政すぐさま相改め、尊王攘夷ニ相基づき、大樹公（家茂）御上洛ニも相成り候やう参り候ハバ、旗鼓を用ゐずして事治り申すべく候へども、幕府ニハ兼ねて君側の姦物これあり候事ゆへ、仲々建言のみニテハ行はれ申さず候。（中略）／廿四日、岩崎甚八郎殿、仙石庄助殿、馬ニテ伏見まで斥候ニ参り申し候処、先づ格別の事もこれなく、ただし薩之方ニ内喧嘩これあり、即死五人余り、手負ひもあり候由。これハ和泉（久光）君の命ヲ違背し、蒼卒ニ事を起すの趣旨故、議論合はず、和泉君より切らせ候由。／右のうち、私、過日、望月清平とともに御目付の命をうけ、薩人ニこの度の一義聞きに参り、その節面談いたし候もの壱人これあり。昨日も京都ヨリ斥候壱人帰り、内々ニテ承り候処、なにぶん三十日を出でずして事の発し候やう申し候。／嘉助（勤務交代に）参り候こと故、（その際には）具足櫃も置くべし（**陣屋に残して置く**）、鉄砲その余、夜具、衣類なども置いてよろし。□品ハなるだけ持たざるやうなさるべく候。／道之助などは、右の時勢につき、何かと稽古も出来申さず、一向に役に立ち申さず。もはや交代の節ニハ相成り候へども、これを以て如何ほど（交代の時期）延び候やも計り難し。勿論、かかるときこそ兄弟放れられぬものニハ候へども、未ダ何かと□のをりもこれなきもの故、かへつて足手まとひニも相成るべきやと存じ奉り候間、都合により私ヨリ先江返し候ひてハ如何かと愚慮致し候。尤も直ちニ交代ニ相成り候へば、かれこれは御座無く候。／しかし、右の如き時勢ニハ御座候へども、御陣家ニテハ何ニも事ハこれなく候こと故、御母公様など決して御気遣ひなさるまじきやう、御伝諭たのみ奉り候。江戸より御飛脚参り懸り候由、明日ハ他出日ニ付き、取敢へず相認め候。先づは右ばかり、日ごろの御安否伺ひたく、匆々かくの如くニ御座候。恐々謹言／四月廿六日

覚之助拝／大人様　膝下／騒然として蜂の巣をつついたようになった陣屋の様子が、この手紙でよくわかるのだが、それと同時にこの頃の覚之助が決して急進的な尊攘派ではなく、むしろ公武合体をよしとする穏健な意見を述べているのは、私にとってはいささか意外な発見であった。前年の九月、武市瑞山の訪問をうけたときの昂奮ぶりから察すると、この時期の覚之助は、伏見に集った薩摩の激派に同調するか、少くとも心情的な共感をよせていて当然であろうと思われるのだが、この手紙を見る限り、それらしい感情はまったくあらわれていない。じつは『維新土佐勤王史』をはじめ、土佐関係の維新史には大抵、この時期に住吉陣屋に詰めていた郷士は幕藩体制に反対する尊攘派ばかりであるように述べており、また覚之助自身についても寺石正路などは「東郡に於て安岡覚之助、西郡に於て樋口真吉、この二人を招かばその余は相率ゐて（勤王党に）来たらんとす」と

いう大石弥太郎の言葉を引いて、覚之助が土佐勤王党の一方の代表であったことを認めている。私は、それらのものに別段、殊更の誇張や歪曲があるとは思わないが、尊攘主義というようなものは多分に情緒的な要素がふくまれており、ちょっとした時勢や局面の違いに左右されるところが多いとはいえるだろう。この覚之助の手紙から見て、「伏見義挙」当時の住吉陣屋は必ずしも勤王一辺倒ではなく、「義挙」そのものも「矢張り浪士の**虚喝**」といっているように、吉村や本間の言動は元来それほど大きな影響力を持ち得るものではなかったと考えていいだろう。だから、そんな吉村たちを捕吏の手から救うために、年少の弟道之助が深夜、陣屋の塀を乗りこえて危急を告げに走ったりすることは、覚之助から見て決して好ましいものには思えなかった。道之助などは、要するに時勢にうかされて、「何かと稽古も出来申さず、一向に役に立ち申さず」いざというときには「かへって足手まとひ**ニも**相成るべきや」という憂うべき少年に見えたわけだ……。しかし、そういう覚之助の意見は、おそらくその二日後、四月二十八日の夜には大きく揺れ動かざるを得なかった。陣屋の塀の外に突然、弟嘉助が大石団蔵、那須信吾の二人とともにやって来て、話がしたいから、と自分を呼んでいるというのである。／那須の実兄あての手紙によると、三人は、その前日、二十七日に大坂に着き、一泊して二十八日の昼間に先ず住吉陣屋のそばまで様子を見に来て、夜になって出直したらしい。そして、「垣ノ内外ニテ密々談合シ」たとある。また『維新土佐勤王史』は、次のように述べている。／……明れば二十八日、泉州堺浦に来り、夜にまぎれて住吉陣営に忍び寄りぬ。安岡と大石とは、同郡（香美郡）の友の多く在営せるにより、牆を隔てゝ之を呼び、その声音に己の誰れたるを知らしめて、牆越しに寺田屋の変より、吉村等の入牢せし事情をも略ぼ聞き取り、その夜は住吉の旅舎に宿せしが、彼の小監察福富に属せる監察吏某々等、早くもこれを探知し、明日を待ちて追捕に向はんとすること、同志の人々の耳に入りしより、翌暁、営門の開くや、即時に人を走らして危急を呼げ、三人を促がし立ち去らしむ。……／両者とも、このように簡単に触れているだけで、そのとき覚之助や道之助が嘉助と出会って何か話をしたかどうかは述べていない。しかし覚之助がこのとき嘉助に会ったことは確実で、なぜなら覚之助は後にそのことで藩から謹慎を申しつけられているからである。何にしても、覚之助の驚きは大きかったにちがいない。／覚之助が吉田東洋のことをどう考えていたか、これについては何も書き遺されたものがないので、まったくわからないが、少くとも東洋を暗殺すべきであるというような考えを持っていなかったことは、先きに引用した文助あての二通の書簡によっても明らかであろう。しかも、その下手人の一人が自分の信頼してきた実弟嘉助であると聞かされては、まったくエラいことをやってくれたという以外に、言葉も出ない有様であったと思われる。おそらく覚之助は、その夜は一と晩じゅうまんじりとも出来なかったに**ちがいない**。ただ、東洋暗殺のことを、覚之助がこの二十八日の夜、弟の口から聞かされるまで知らなかったかどうか、そのへんのことになると全然様子がわからない。ちなみに、寺村左膳の日記によれば、四月二十一日には吉田東洋横死の報は江戸の藩邸に届いており、そのため容堂は激怒している。但し、これは大廻船に便乗した足軽藤左衛門なる者の報告であって、飛脚による正式の通報ではない。飛脚が江戸に着いたのは二十六日で、その用状には吉田の死だけではなく、藩庁重役の交代や豊範の参覲出発延期のことも一緒に述べられてある。してみれば、住吉陣屋にも東洋暗殺の報せは、遅くとも二十六日以前――おそらくは二十日前後――に届いているはずである。また住吉陣屋には、河野万寿弥、弘瀬健太、小畑孫三郎の三人が、武市の手で監察吏として伏見義挙の状勢を探るために、早ければこの月の下旬に送りこまれている。河野は観音堂で那須から東洋の首を受け取り、それを梟首にした仲間の一人である。そんな男が、あろうことか監察吏という名目で上京してきたのは、吉田の死後の政変で、武市と始終気脈を通じてきた小南五郎右衛門が大監察の地位についたからである。河野たちが陣屋に来れば当然東洋の死を同志の連中に伝えたにちがいない。そうしたことを考え合せれば、覚之助は嘉助たちと顔を合せる前に彼等が国許で何をやってきたかを察知していた可能性は充分にある。いや、ことによれば覚之助は、嘉助たちがやってくる二日前、つまり四月二十六日頃に、すでにそのことを知っていたかもしれない。ただ、そうなると、覚之助が文助あてに二十六日づけで出した手紙の中に、それについて触れたところが一つもないのは、まことに不可解という他はない。／いずれにしても、東洋の殺害事件は連枝や藩上層部までが加担しているだけ

に、その真相は極秘になっていたらしく、事件の当座しばらくは、手紙にも迂闊なことは書けなかったようだ。陣屋の覚之助あてに、文助から四月二十三日づけで嘉助の失踪を告げた手紙が届いた模様で、覚之助はそれに対する返辞を五月七日づけで出しているのであるが、それにも東洋の事件については一言も触れておらず、嘉助が陣屋へあらわれたことも隠しとおしている。そして自分は勤務交代になったら直ぐさま帰国するから安心してくれと、そればかりを強調しているのは、年老いた父親を他に慰めようもなかったからであろう。／四月廿三日の御状、この間相達し、拝読仕り候。嘉助こと、行方相分らずなり候趣、さぞさぞ御心配ならるべく、御愁歎のほど察し奉り候。何ぶん当今の時勢差し迫り候ニ付き、我が国に居り候ひテモ、思ふ通り勤王も出来兼ね候より、慷慨の心あふれ出で、父母妻子のことも忘れ、亡命致し候ものなるべし。／右に付き、私をも殊のほか御気遣ひ、御尤も至極に候。神州ニ生れ候もの、いづれか勤王の志なからん哉。然れども、藩臣ニハ藩臣の様ありて、我が藩主ヲ勤王の主にもり立て、その上ならでハ我が父母ヲ捨て、我が藩主ヲ見放してハ、二百年来の御国恩請け候詮もこれなきことと愚存仕り候。／しかし嘉助の着眼ハ、他ニ弟もこれあり候ニ付き、祖先の祝りを奉ずるの見付もあり、かかること故、先キヲ唱へ、国内偸安の人々ヲ奮起致させ、且ハ平生存慮の処を相達するつもりなるべし哉。全く鄙劣の心より起りての事ニテハこれなく、赤心報国の志激発致したるものと存ぜられ候。／御両親様へハ御心配を相懸け候へども、乱世ニハ父子、敵味方ニ別れ候こともこれあり候こと故、婦女子の御歎きなされぬやうに祈り候。私も御暇ニ相成り候ヘバ、直ぐさま帰足仕るべく候。／未ダ交代の人も着き申さず、いづれ四、五日うちニハ北山通りの面々到着いたすべくと存じ候。浦戸通りハ多分遅かるべし。帰りハ一日ニテモ早く仕りたく、仰せ付けハ浦戸通りニ候へども、大坂より直乗りを以つて北山通りのつもりニテ御座候ニつき、何ニモ御気遣ひなされまじく候。／先づハ右ばかり。今日、山田の人、森本某、この地江歯術の修行ニ参り候人、帰国と申すこと故、取り敢へず一筆相託し候。尚、万事帰宿の節に申し述ぶべく。恐々謹言／五月七日　覚之助拝／大人様膝下／二白、御母公様など、決して御気遣ひなされまじきやう、御伝論願ひ奉り候。

(2)　同右。但し　松下与膳→松下典膳　陣屋に残して置く→家に置いて来い　虚喝→嘘喝　ニも→にも　ちがいない。→ちがひない……。

(3)　那須、大石、嘉助たちが住吉陣屋に近づいて、陣屋のなかにゐる同志と連絡をつけたときの様子はどうだったのか、ハッキリしたことはわからない。那須の実兄に当てた手紙でも、ここは、／廿八日、住吉御陣屋近所江行キ、御陣屋詰同志を尋ネ、夜分、垣之内外ニ而密々談合シ、住吉宿や止リ居リ候所、其事聊か露見シ、追捕之者出デ候趣、翌早々、宿や迄同志より内通有之……／と極めて簡略に述べてゐるだけだ。しかし、この略筆した文面でも、四月八日に吉村寅太郎が本間精一郎をつれて乗り込んだときとは打つて変つて、陣屋の内外に警戒の眼が光り、絶えず緊張感がはりつめてゐたことだけはよくわかる。じつは私は「夜分、垣之内外ニ而密々談合シ」といふくだりで、覚之助、道之助と、嘉助とが、夜陰に乗じて陣屋の垣根ごしに、兄弟三人で手を取り合ふ場面を想像したいのであるが、そのやうなことは那須の手紙には勿論のこと、「土佐勤王史」その他、出来るだけいろんな維新史や土佐関係の資料を当つてみたが、何処にも見当らなかつた。しかし、たつた三行しかない文久二年の文助の日記にも、わざわざ、「五月廿日　覚之助、道之助、大阪ヨリ帰ル」としるしてあるところからみて、この二人が四月二十八日に住吉陣屋にゐたことは、まづ間違ひない。そして那須たち三人は昼間のうちに陣屋の近くまできて、陣屋詰めの同志と連絡をとつてゐるのだから、このとき覚之助、道之助の兄弟は、嘉助がきたことを知らされなかつたはずはない。おそらく二人は夜がきて周囲が暗くなるのを待ち兼ねるおもひであつたであらう。彼等も前年の四月二十一日に家を出てきて、嘉助と会ふのは一年ぶりのことだから、おたがひに積もる話もあつたであらう……。もしこの二人が、嘉助が陣屋の塀の外まできてゐるのを知りながら会へなかつたとすれば、理由は一つしか考へられない。それは那須信吾、大石団蔵、安岡嘉助の三人が、すでに東洋暗殺の犯人として藩庁から目星をつけられてゐて、陣屋のなかにゐる安岡兄弟も嘉助の身内として監察吏たちに疑はれてゐるため、迂闊に塀のそばへ寄ることも出来なかつたといふことだ。さうだとすれば、二人は塀の外にゐる嘉助を想つて、どんなにかヤキモキしたことであらう。／しかし当時の情勢は、さうした私情をさしはさむことを許さないほど切迫し

てをり、かつ陣屋のなかでも誰が敵やら味方やらわからぬほど混沌としてゐた……。すでに陣屋には、伏見義挙の推移をさぐるために監察吏として河野万寿弥、ほか二名が武市瑞山に派遣されてきてゐた。河野は観音堂で那須たちから吉田東洋の首を受けとり、雁切河原でそれを梟首にしてきた仲間の一人である。それが、あらうことか監察吏といふ名目で住吉陣屋へおくりこまれてきたのは、吉田の死後の政変で瑞山と気脈を通じ合つてゐる小南五郎右衛門が大監察（大目付）になつたからである。さういふことから考へると、陣屋のなかでは勤王派が大手をふつて何でも出来さうに思はれるが、一方にはれいの小監察（小目付）福富健次の一派もがんばつてゐて、吉村寅太郎を眼の前で取り逃がしたときの失敗を二度と繰り返すまいと、勤王派の連中に眼を光らせてゐる。／さういへば、吉村とこの福富とは、まことに因縁浅からざるものがあり、伏見義挙があれほど勤王派の期待を集めた島津久光の手によつて逆に弾圧され、吉村は伏見の寺田屋に出掛けたところをつかまつて京都の薩摩藩邸に幽閉されるのであるが、この吉村を土佐藩から引き取りにきた小監察は福富であつた。薩摩側は吉村を福富に引き渡すとき「この者は、その国家につくす赤心は嘉すべきものがある。故に貴藩でこの者に厳罰を加へたりされることは、かへつて朝廷の御自旨にも反することになるわけだから、そのへん十分に御注意ありたい」と伝へたのだが、福富は吉村を住吉陣屋へつれて帰ると、早速、普通の囚人と同様、入牢させてしまつた。吉村は忿懣やるかたなく、／ますら雄の死ぬる命はいとはねど／はづかしめらるゝことの憂き哉／といふ歌を詠むのであるが、とにかくこのやうにして吉村も、五月五日に船牢で土佐へ追ひ帰されるまでは、陣屋の牢に閉ぢこめられてゐたわけだ。／こんな具合だから、仮に覚之助や道之助が塀のそばまで行つて、垣根ごしに嘉助とおたがひの健在をたしかめ合ふことが出来たとしても、暗闇のなかで一別以来の家族の情をかはすことは到底不可能であつたらう。「土佐勤王史」には、／安岡と大石とは同（香美）郡の友の多く在営せるにより、牆を隔てゝ之を呼び、其の声音に己の誰たるかを知らしめて、牆越しに寺田屋の変より、吉村等の入牢の事情をも略ぼ聞き取り、……／とあるが、それは文字通り「略ぼ聞き取」つたに過ぎないのであつて、どうして寺田屋で吉村が摑まつたのかといふことだけでも、納得の行く説明をきくひまは全然なかつたに違ひない。三人は、その晩は早々に住吉の宿に引き上げるのであるが、それでもやはり福富配下の監察吏（目明し）に居所を嗅ぎつけられて、那須の手紙にあるやうに、翌朝払暁に同志からの注進をうけ、危いところを摑まらずに、大阪へ逃げ帰るのである。

※9

(1) この頃、京都にいた薩摩藩士は、前記の海江田、吉井のほか、大久保利通、奈良原喜左衛門、同喜八郎の兄弟などで、ほとんどが島津久光側近の公武合体派（尊攘派の穏健グループ）であった。海江田や奈良原兄弟は、久光の命をうけて伏見の激発グループの鎮圧に向っており、弟の奈良原（喜八郎）などは寺田屋へ斬り込んだ際、負傷している。また西郷隆盛は、久光とは別個に自身で激発グループを何とか慰撫しようと努力していたが、そのことが誤解を生み、久光の逆鱗にふれて薩摩に強制送還されたうえ徳之島に流された。そんなだから、土佐郷士の過激派に共感したり同調したりする者は一人もいないはずであった。それなのに、なぜ薩摩藩邸ではこの三人を手厚くかくまってくれたのか。或いは、それは久光が伏見で勤王激派に大弾圧を加えたことで、薩摩は京都の勤王派の間でいちじるしく人望を失った、そこで長州から土佐勤王党の脱藩士の庇護をたのまれると、自藩の勤王の立場をハッキリ示すために、これを引き受けたというようなことでもあるのだろうか。もっとも、久光が江戸に下ったとき、大久保以下、久光の側近は全員これに随ったので、那須、大石、嘉助の三人が、海江田や吉井の旅宿から薩摩邸に移ったときは、右の連中は誰もいなかったことになる。／いずれにしても、那須たち三人は、六、七、八と三箇月は、藩邸の外へは一歩も出ずに日を送ったらしい。翌、閏八月の半ば頃から、夜間だけは外出ができるようになった。それで三人は、長州藩邸や、薩摩藩士でも藩邸外で暮らしている連中の宿へ出掛けて、外の空気を吸い、時勢を論じたり、酒もりをしたり、かなり自由に振舞えたようである。

(3) しかし、これはあながち薩摩の人たちが、那須、大石、嘉助の三人を、片時も眼のはなせぬ狂暴な連中と見做してゐたわけでもなささうだ。といふのは、六、七、八と三箇月は、三人とも藩邸の外へは一歩も出ずに日を

送つてゐたのだが、閏八月の中頃から夜間は外出が出来るやうになつて、長州藩邸や薩摩藩でも藩邸外で暮らしてゐる連中の宿へ出掛けて、おたがひに時勢を論じたり、かなり大ぴらな行動が許されるやうになつてゐるからだ。

※10

(1) ところで、閏八月七日には、公武合体の大任を終えた久光たちの一行が江戸を引き上げて入京してきた。じつはこれが、薩藩邸にかくまわれていた三人の夜間外出を許されることになった最大の理由であったかもしれない——。八月二十一日、京へ向う久光一行の行列が武州生麦村に差しかかったとき、騎馬の外人数人が道へ飛び出して行列の先頭を横切った。「何たる無礼者か」と、奈良原兄弟や海江田たちが斬りかかり、外人（英国人）一人を殺し二人を傷つけた。いわゆる「生麦事件」である。この事件が後に賠償問題から薩英戦争にまで発展することは周知のとおりだが、事件の当座、世間ではこれを「攘夷の快挙」とはやしたて、真ッ先きに馬上の外人に斬りつけた奈良原や、またこれに止めを刺した海江田など、その果断な挙動を賞讃されて、一行の行列は意気揚々と京に入った。しかるに、一行はここで再び意外な事態に遭遇し、久光たちを憤慨させることになる。自分たちがほんの三、四箇月、京都を留守にしている間に政情は一変して、長州、土佐を中心とする尊攘派の勢力が圧倒的になり、久光や大久保が苦心して周旋してきた公武合体策など、いまは生温い佐幕論であるとして、片隅に追いやられてしまっていたのである。この有様に憤激した久光は、在京わずか十日ばかりで席を蹴るように薩摩へ帰ってしまう。その結果、京都はいよいよ長土両藩尊攘派の天下となった。／これでは、もはや薩摩藩は、邸内にいる土佐の脱藩士を監視する気にもなれなかったであろう。那須、大石、嘉助の三人は、その後ほぼ一年間、薩藩邸内にかくまわれるのであるが、おそらく夜間外出のみならず、かなりの自由勝手が許されたはずである。

(3) もし仮に薩摩藩が、那須信吾、大石団蔵、安岡嘉助の三人を、危険なテロリストと見做して、藩邸内に保護するかたちで実は監禁してゐたといふやうなことであれば、この不穏な時機に彼等に夜間の外出を許したりするわけがない。たしかに、伏見寺田屋で志士たちに大弾圧を加へたのが島津久光の意向であるとすれば、その直ぐあとで那須たち三人を手厚く保護したのは、どういふ理由によるものか、不可解といふ他ないのであるが、ともかく彼等はその後、一年間、薩摩藩邸内にかくまはれるのである。

※11

(1) もしこれが実相であるとすると、前に私が吉田刺殺の志願者が大勢いたので、それを整理するために次ぎ次ぎに新たな刺殺隊を繰り出したと述べたことは、まったく誤りであったことになる。しかし私は、右の記述には大いに疑問がある。少くとも第一組、第二組の刺殺隊が更迭された理由はこれではわからない。そして第三組が、決行当日の朝になって嘉助が参加を申し込み俄かに結成されたというのは、あまりにもお粗末ではないか。繰り返していえば、吉田東洋は参政といっても土佐藩庁第一の実力者である。万一その暗殺に失敗すれば、責任は連枝に及ぶ可能性があり、そうなれば勤王党ばかりでなく藩全体が危殆に瀕する惧れもある。したがって刺殺隊は絶対に失敗を許されないから、その編成には最も意を用いているはずである。決行当日の朝、駈け込んできた者をイキナリ刺殺隊に加えるなどということは到底、考えられない。仮りに私の想像が不充分であり間違っているにしても、「武市瑞山年譜」その他の記述もそのままには受け取り難いのである。第一組、第二組の刺殺隊がなぜ更迭されたか、そこにはいまとなっては窺い知ることの出来ない理由もあろう。いまはそれを詮索するよりも、やはり東洋暗殺の志願者は大勢いて、そのなかから適任者を選んで三箇の刺殺隊を瑞山自身が編成したものと推量しておきたい。——これは後に述べるが、容堂の弾圧で土佐勤王党の主だった連中が取調べをうけたとき、苛酷な拷問にもかかわらず、瑞山が吉田殺害計画に加担していたことは誰一人、一言も漏らしていないのである。また、当時の記録も証拠物件になるようなものは完全に湮滅して何一つ残っていないから、この事件に関する正確な史料はまったくない。せいぜい事件の周辺にいた古老の回顧談にたよったものしかない。第三組で、最初に那須信吾が白羽の矢を立てられたのは、おそらく腕ッ節を買われたものであろう。吉田東洋はすでに中年過ぎの年齢だが、剣の腕はなかなか強く、相当の腕前の者で

なければ吉田を仆すことは出来ないからである。次に、大石団蔵は大石弥太郎の従弟で、久坂玄瑞とも面識があり、旅慣れてもいるので、逃走のときの案内や他藩との折衝の役に立つと思われたのであろう。最後に嘉助は、大石団蔵が連れてきたように述べたものもあるが、すでに前年九月、覚之助の書簡にもあるように、嘉助は瑞山のところへ挨拶に行っているはずであるから、いまさら大石に紹介されるまでもないわけだ。大石の家は野市にあって、山北の安岡の家とも近く、おたがいに以前から知り合っていたから、むしろ「血気ノ勇」にはやって何を仕出かすかわからない団蔵を抑える意味もあって、そばに嘉助をつけたのではないか。／しかし、嘉助が吉田の暗殺に参加した理由はそれだけだろうか？　私は一応、前年三月の井口村事件のことも考えてみたいのである。あのとき大石弥太郎をはじめ、郷士の「不免俗組」の連中が池田の家に詰めかけて、上士の山田たちの仲間と対抗して気勢を上げたことは、すでに述べた通りだが、そのときの郷士の結束が半年後の土佐勤王党の結成につながるというのは、坂崎紫瀾以下、多くの人の説くところである。

(3)　しかし、すでに述べたやうに私は、これをそのまま事実として受け取るには疑念がある。時の藩の最大の権力者を屠るには、計画がいささか杜撰であるし、刺殺隊をさう何度も編成し直す必要があるとも思へないからである。しかし、大石団蔵と一緒に長州、薩摩の探索に出たことのある山本喜三之進が「団蔵血気ノ男、或ハ大事ヲ誤ランコトヲ恐レ、来リテ之ヲ瑞山ニ謀ル」とあるところをみれば、重臣の暗殺には武力だけではなく精神力が重要であつて、或ひは一ノ組、二ノ組の失敗も、単に待ち伏せの時刻と場所を得なかつたといふより、胆力気力に欠けるところがあつたためと見做されてゐたのかも知れない。さう考へれば、第三組の刺殺隊を急遽編成し直すといふことも有り得ないともいへない。もつとも、瑞山の塾にきてゐた男が、東洋暗殺の話をきいていきなり、おつとり刀でその場に駈けつけるなどといふのをみれば、刺殺隊の組織や計画は案外、かなり好い加減な、行き当りバッタリのものであつたのかとも思はれる。そして、さうだとすれば、嘉助が暗殺決行の当日、瑞山に刺客志願を申し入れ、即座に第三組が編成されたといふのも、割り合ひ素直に受けとれる。ところで、その場合、嘉助は何からそのやうに思ひ詰めて、瑞山のところへ行つたのか――？　私は一応、それには一年前の三月八日、井口村で起つた事件のことを考へてみたいのである。／上士の山田広衛と、下士の中平忠次郎とが衝突した井口村事件は、まことにツマらぬ個人的な喧嘩であるが、その影響するところは甚だ大きく、「不免俗組」をはじめ郷士全般を憤激させたことは、すでに述べた。喧嘩のあとの藩の処分が、例のごとく上士には軽く下士には重かつたことから、郷士は結束して上士に対抗するやうになり、それはやがて土佐勤王党の結成をうながすことになつたといはれてゐる。安岡の家の者にとつてとくにこの事件を忘れ兼ねるのは、喧嘩のとき中平のつれてゐた少年宇賀喜久馬が、上士への申し訳立てに十三歳で切腹させられたことだ。宇賀喜久馬は、安岡文助の実弟別役俊蔵の妻の末弟であり、喜久馬の父宇賀市郎平は文助の友人でもあつて、喜久馬の切腹は代々安岡の家の語り草になつてゐる。文助の日記は、直接これについては何も語つてゐないし、したがつて文助の息子たちが何を考へてゐたかも、無論わからない。ただ、ここに武市瑞山が文久三年二月附けで山内容堂に呈出した「土佐勤王党血盟者姓名簿」なるものがあり、瑞山以下、坂本竜馬、平井収二郎、中岡慎太郎など百九十二名の名前がならんでゐるが、それに覚之助、権馬、覚馬の三人の安岡の男たちの名も上つてゐる。嘉助の名前が上つてないのは、この名簿が文久三年二月現在のものだからで、那須信吾、大石団蔵、それに入牢中の吉村寅太郎の名もここでは、わざと削られてゐる。また、権馬や覚馬の長兄に当る恒之進の名前が見えないのは、前年の夏、住吉陣屋で死亡してゐるからであらう。

※12

(3)　これは異例の出世であつた。／しかし、文久二年は土佐勤王党豊作の年といはれるが、武市個人としても、土佐勤王党としても、これが幸運の絶頂であつたといへよう。これ以後、翌文久三年の八月まで、この幸福状態は一応保たれるものの、それ以後、彼らの命運は一挙に下向するのである。／文久三年（一八六三）、正月、山内容堂は京都に上つた。将軍上洛を前にして、三条実美や姉小路公路など、急進派の公卿たちを説得して、一橋慶喜、松平春嶽など、公武合体論の武家たちとの交渉をまとめるための根まはしをすることが、その目的であつた。しかし、ことは容堂のおも

ふやうには進まなかつた。江戸とちがつて、京都では急進派の公卿たちのうしろには、長州藩や土佐勤王党、そのほか全国から集つた浪士たちの強硬な支持があつたからだ。容堂の性格として、これは単に交渉がうまくすすまないといふ以上に、自尊心を傷つけられたやうな腹立たしさを覚えさせられることであつたに違ひない。とくに土佐勤王党の連中は、大半が要するに郷士、足軽などの下士か、庄屋など、それ以下の身分の者に過ぎない。それがいつぱし国士気取りで公卿の後盾をして、自分の意見に反対するなど、笑止といふもおろかである。しかし、さらに容堂にとつて我慢のならなかつたことは、或る意味で自分と苦楽をともにした吉田東洋の殺害者さへ追捕できぬ藩体制の弱さであつた。無論、容堂は東洋暗殺の下手人が武市配下の者であることは十二分に承知してゐた。しかし、その武市は昨年、勅使の江戸下向のときには情報源として貴重な存在であつたから、甘い顔をして見せなければならなかつた。そのとき以来の不快が、この京都で交渉不調の間に耐え難いまでに増大してきたのである。しかし、容堂はその忿懣を隠したまま、三月二十六日、京都を去つて土佐へ引き上げた。

※13

(1) と、二度にわたってしるしてあるのは何だろう。おそらくそれは覚之助からの手紙が届いたものかと考えられるが、そうだとすればこの両日の手紙にはよほど重要な事柄が述べられていたものと思われる。なぜなら覚之助は、前年の住吉陣屋からの例でもわかるように、かなり頻繁に父宛ての手紙を書いており、また文助はふだん書簡を受けとっても、そのことをいちいち日記に書きとめる習慣はないからである。この年、京都の覚之助から文助あての手紙で私の手許にあるのを日附順に上げると、次の五通である。／一、六月十八日（推定）／一、六月二十六日／一、七月十二日／一、七月二十六日／一、八月二十四日／覚之助が京都に着任したのは二月初旬であるが、それから六月十八日までの四箇月あまりの間、一通の手紙もよこさなかったわけはないので、この間の手紙は文助自身によって処分されたか、それともいつか屑紙の中にでも紛れこんで失われたかしたものであろう。三月二日と三月十一日の手紙も残されていないので、その内容がどんなものであったかは無論わからない。しかし、文助がこの両日の日記に「京状来ル」とだけ書いて、差出人の名前も伏せているのは、ことによればこの手紙は、覚之助からではなく、嘉助からのものではなかったかという気もする。すでに述べたように、嘉助から文助にあてた手紙は一通もないのであるが、これは単に嘉助が筆不精から鉄砲玉のように国を飛び出したまま手紙一本よこさなかったとは考え難い。おそらく嘉助は、自分の仕出かしたことで父親に迷惑が及ぶのを惧れて手紙を書かなかったのであろう。或いはまた、嘉助から来た手紙を文助が固く秘匿して何処かへ失くしてしまったものかもしれない。前年五月、嘉助出奔の報らせをうけた覚之助が父を慰める手紙のなかに、「婦女子の御歎きなされぬやうに祈り候」とあったことからも、その頃の文助の気弱になっていたことは察せられるのである。そのことと想い合せて、もう一度文助の日記を眺めると、「京状来ル」という小さな文字――とくに三月二日のそれは判読し兼ねるほど細かな文字だ――は、いかにも重罪を犯して失踪した息子の行く末を案じている父親の懊悩ぶりを語っているようにも思われてくる。／想うに、覚之助は京都藩邸の「密事御用」となって間もなく――たぶん二月の半ば頃に――嘉助と何処かで出会い、そのとき「親父が心配しているから手紙を書くように」とすすめたのではないか。覚之助は職掌柄、藩の飛脚などをかなり自由に使えた模様で、嘉助の手紙も覚之助の名前で藩の公用飛脚にまわせば、途中で怪しまれることもなく無事に父の手許に届くはずだ、と覚之助はそんなことを弟に言いそえたかもしれない。勿論、これは私の想像だから、事実がどんなことであったかはわからないが。／当時の京都は、朝廷に呼びつけられるかたちで江戸から将軍家茂が上京してくるし、松平春嶽や山内容堂など政界の有力者も続々とやってきて、上加茂、下加茂、石清水八幡宮への行幸と攘夷祈願がおこなわれ、尊攘激派の勢力はまさに絶頂に達しようとしていた。しかし絶頂期は同時に崩壊のきざすときでもあり、この頃から土佐勤王党は重大な危機を迎えつつあった。／容堂の入洛は、将軍上京よりも一と月あまり早い一月二十五日であったが、翌日、平井収二郎が容堂によばれて出頭すると、容堂は急病であるといって平井との謁見をしりぞけた。三日後の一月二十九日、平井はあらためて河原町藩邸に出向いて謁見を許されたが、時局に関する意見を述べた

ところ、たちまち容堂の激怒をかい、面罵されて帰ってきた。そして翌二月一日、平井は他藩応接役を免職にされてしまうのである。このことで平井は非常なショックをうけた。そのために翌日、平井は尊攘派の公卿、関白鷹司輔煕によばれていたのに、病気を理由に参上を辞退したほどである。／平井が苦しんだのは、何も自分の開陳した意見を容堂から反対されたということではない。彼が述べ立てた時勢論は要するに攘夷推進の気運に乗り遅れるなという、京都では常識とされている程度のことであり、容堂**がそれに**反対するということも予めわかっていたようなものであった。しかし、あくる日になって自分が他藩応接役を下ろされてしまうことまでは考えていなかった。これは容堂の怒りが、一時の感情を激発させたわけではなく、自分たち尊攘派に対して反撃態勢に出たものと解すべきであった。／もともと朝廷が将軍家茂の上京をうながしたのは、前年、三条勅使を通じて幕府に要求してあった攘夷と親兵設置の実施を催促するためであった。勿論、この要求は実行不可能の難題であるが、もしこれを拒否すれば朝廷の背後にいる長州、土佐の尊攘派から、「違勅」の責めを負わされて幕府はたちまち窮地に追いこまれることになる。したがって、幕府としては、これまでのとおり表面に「奉勅」をかかげながら、その実行を一寸のばしに延ばして何とか時をかせぐ以外にない。容堂が将軍上洛の一と月まえに上京してきたのは、その事前工作をおこなうためであり、運動資金として一万両を幕府から融通**されていたともいわれる**。そういう容堂が、京都でいったいどんな大芝居を打つかは、朝廷といわず在京の諸藩士が注目していたところだ。勿論、瑞山一派の土佐勤王党も手ぐすねひいて容堂の上京を待ちうけていたのであるが、それにしては彼等は初っぱなから最も拙劣な対応に出た。一月二十二日、汽船で江戸から大坂に上陸した容堂が、まだ長堀の土佐藩邸に休息している頃、彼等はれいの「天誅」をおこなったのである。／血祭に上げられたのは、たまたま容堂が藩邸の夕食の席に招いた儒者池内大学で、池内はその帰り途、拝領の金子やら画帖やらを抱えて駕籠に乗り、難波橋にさしかかったところで襲われた。刺客は数人で、なかの一人は岡田以蔵であるとされているが、あとは誰であったかわからない。池内の首は、翌朝、難波橋の上にさらされた。池内は安政年間、将軍継嗣騒動のとき一橋慶喜擁立の側に立って裏面工作につくしたが、安政の大獄が起ると自首して獄を免れたため、仲間を裏切った変節漢として悪評を立てられており、梟首の罰文にも、右の主旨がかかげられていた。しかし「天誅」の目的は、そういう池内を罰するよりも、容堂に対するイヤガラセのためであった。容堂が将軍継嗣問題で藩主の地位を下りて謹慎させられたのは世間周知のことだが、それが池内のような者を傍近くによんで酒食をともにしたのは容堂自身が節を曲げたことになるではないかという暗喩が、そこに働いていたと考えられるからである。／ところで、残虐なイヤガラセはこれで終ったわけではない。容堂が入洛してから十二日目、平井が他藩応接役を下ろされてから一週間後の二月八日、こんどは唐橋村の惣助という者の生首が、河原町の土佐藩邸の門前に罰文とともに置いてあった。／唐橋村　惣助／右は年来、千種（有文）などへ出入致し、奸謀相助け候者にて御座候。今般、攘夷の勅諚仰せつけられ、大樹公（家茂）御上京については、大平遊惰の弊を一洗し、皇国の武威を八蛮に輝かせ候儀、今日の機会を失ふべからず。老公様（容堂）御上京の御処置によつては、実もつて神州の安危に相係はり候こと、容易ならず、速かに攘夷の期限を決め、人心の帰向を定め、多年宸襟を悩まし奉る醜夷を一期に御退治なされたく、天下万民の歎願するところに候。この首は一軽賊のもの、実検にそなへ候には不足に候へども、誅戮を加へ候につき、先まづ血祭の印、轅門に供し奉る。宜しく御披露給ふべく候也。／千種有文は岩倉具視などとともに、和宮の江戸下向に協力したといわれ、富小路敬直、今城重子、堀河紀子などと並んで、三奸二嬪と称された公武合体派の公卿の一人である。惣助はその千種の使い走りをつとめたというだけで、容堂とは何の係わり合いもない。しかし罰文の主旨は、先頃平井収二郎が容堂の前で開陳した意見と大要同じものであり、その意味でこれは池内の「天誅」よりも、一層露骨に容堂の公武合体論を批判恫喝したものといえるであろう。平素は鼻っ柱が強く、めったなことでは弱音を吐かない容堂も、この生首のイヤガラセには閉口したらしく、松平春嶽にあてた手紙に、「今朝、僕が門下へ首一つ献じこれあり候。酒の肴にもならず、無益の殺生、憐れむべし憐れむべし」とある。／しかし、ここで不可解に思われるのは、武市をはじめ尊攘派の連中が容堂に**対して**あくどいイヤガラセを繰り返しながら、一方で激しい期待の念を持ちつづけていることだ。兼

ねてから容堂は、山内藩は徳川家の恩顧をうけており、関ヶ原の戦に敗けた長州藩や薩摩藩と同調して幕府に盾つくことはできない、と幕府支持を明言していて、尊王と佐幕を両立させること――つまり公武合体の政体をとること――を絶対に堅持していることは、誰の眼にも明らかなはずである。にもかかわらず武市一派が、そういう容堂に尊攘支持を期待してやまなかったのは、なぜだろうか？　簡単にいえば、それは容堂が勤王党のまえではつとめてそのように振る舞ってきたからである。

(2) 同右。但し　容堂がそれに→それに容堂が
されていたともいわれる。→されてもゐた……。　対して→対して、

(3) と、二度にわたつてしるしてあるのは、おそらく京都の覚之助から書状が来たものかと思はれる。いや、二日か十一日のどちらかの「京状」は、ことによれば嘉助からのものであつたかもしれない。いづれにしても、文助あてに京都から書状をよこす者は二人の息子以外には考へられないが、差出人の名前を伏せてゐるところをみると、書状の内容はよくよく他聞を憚るものであつたに違ひない。それなら何も「京状来ル」などと小さく――とくに二日のそれは判読しかねるほどの細かな字だ――書き込むこともなささうなものだが、それをつい書いてしまつたところに文助の父親としての情が窺はれる。とにかくこの「京状」なるものも、文助によつて処分されたものか、それとも屑紙と一緒に何処かへまぎれこんだものか、いまはのこつてゐないので、覚之助の京都での活動をいくらかでも推察させるものは、次の二通の手紙しかない。／一通は、那須信吾がこの年八月十二日、つまり「天誅組」旗上げの直前に養父にあてたもので、明日から出陣するが、ついては形見に小袖一枚を安岡覚之助にあづけるから、どうか受け取つてもらひたいといふ意味のことが述べてある。たつたそれだけのことだが、覚之助と那須たちとの間に連絡のとれてゐたことは、これでわかる。もう一通は、その後、「天誅組」が五条代官所の襲撃に成功したとき、吉村虎太郎が陣屋から京都にゐる土佐藩の同志にあてて、その近況を報告すると同時に、京都でもこれに呼応して国事の周旋につとめるやう述べたものだ。／今十七日、申下刻（午後五時）和州五条着。即時、代官舎に討ち入り、賊主鈴木源内を初め六人の首を討ち取り、その余八人を縛し、即夜宿舎を焼き捨て置き、十八日、右代官下七万石村民ども服し来り、昨十九日、僕等旗本どもの領村へ立ち越し、十一ヶ村降伏、勢ひ日々に盛に相成り、今日、前侍従様十津川へ御引移り、不日大軍を御引卒の上、御上京にも相成らるべきに付き、早々朝敵相模守を御討取りなされ、片時も早く御親政遊され候様、御周旋肝要の御事に候。／八月廿日／吉村虎太郎（花押）／島村寿之助様／土方楠左衛門様／安岡覚之助様／二白／安岡君へ申上候。過日御頼み申し上候品代払、大高屋へ鎧代十六両二分御渡下さるべく候。その余の払ひは即夜相済ませ申候。若し間違ひこれあり候はば少々のことは丹寅にて受取り候様、御申聞かせ下さるべく候。／一金　弐拾壱両弐分　大高屋　鎧代／内金五両也　先達て相渡／〆拾六両不足／一金　弐拾両也　過夜御渡申上候／内金拾六両弐分　大高屋払／〆三両弐分　金銀／此分古東領左衛門へ御渡下さるべく候。／手形／一金　三両弐分也／右淡州古東領左衛門へ御渡下さるべく候。／亥八月廿日　吉村虎太郎（花押）／京河原町土佐屋式ニテ／安岡覚之助様／この手紙は残念ながら覚之助の許には届かず、八月二十五日に町奉行から会津藩公用方に回送された。吉村のいふとほり、たしかに八月十七日には「天誅組」は吉野五条の代官所を襲つてこれを占拠したのだが、翌十八日は京都で政変が起り、はやくも吉村たちは知らぬ間に孤立させられてゐる。したがつて八月二十日に出されたこの手紙は、幕府側の警戒線にかかつて、たちまち町奉行の手に抑へられたものであらう。それにしても、吉村が多忙な陣中にあつて、こんなに細ごまとした貸借の精算を友人に指示してゐることには、感心させられる。吉村が覚之助に「過夜御渡申上候」といつてゐる金は、いつ頃、何処で渡されたものかはわからない。しかしおそらく「天誅組」旗上げも迫つた頃、吉村は河原町の土佐藩邸に、島村、土方、覚之助らを訪ねて自分たちの挙兵のことを告げ、同時に覚之助に二十両を渡してゐる。鎧など自分の購入した武具の代金の支払ひを委託したものであらう。ただ、多少不審なのは、吉村が代金後払ひで鎧をすでに買つてゐたのだとすると、金を覚之助に渡す際に、これを大高屋に支払ふやうにと言ふはずであるが、手紙にそのやうなことはなく、唯、「その余の払ひは即夜相済ませ申候。若し間違ひこれあり候はば少々のことは丹寅にて受取り候様」とあるのをみると、吉村が覚之助に金を託したときには、まだ鎧は買つてゐなかつたやうにも思はれる。しかし、それならなぜ武具屋を物色するまへ

に金を友人に預けてしまつたのか、これはわからない。おそらくこんなところから後に、吉村が鎧を持ち逃げしたといふやうなこともいはれるのだが、これは勿論、悪意による作為の伝説である。当時の緊迫した状況で、しかも非常に大きな野望に燃え立つてゐる吉村が、そんなことをするわけがない。疑ふとしたら、むしろこの手紙が後世の誰かの偽作ではないかといふことであらう。といふのは、佐々木高行の日記にも、吉村が島村、土方、安岡にあてたこれとほぼ同文の手紙が収録されてゐるが、佐々木日記のなかのそれは明らかに事実に反するところや誤写と思はれる個所が多数あつて、全然ツジツマが合つてゐない。そして、このやうにほとんど判読し難いほど誤記や誤写が多いといふのは結局、収録されたもとの手紙が怪しげなものだからではないかとも思はれるからである。しかし前掲の吉村の手紙は、専門の史家の著作にも採録されたものだから、素人の私などの余計な詮索は慎むべきであらう。／それはさてをき、この吉村が戦乱の五条から出した手紙で、一番の要点は、主文の末尾に、／今日、前侍従様（中山忠光）十津川へ御引移り、不日大軍を御引卒の上、御上京にも相成らるべきに付き、早々朝敵相模守を御討取りなされ、片時も早く御親政遊され候様、御周旋肝要の御事に候／といふところであらうが、その「御周旋」とは具体的には、どういふことなのであらうか――？　じつは佐々木日記に収録された手紙では、「今日、前侍従様、十津川へ御引移り」とある「前侍従様」と「十津川……」の間に、十数行、吉野義挙とは無関係の事項が挿入されてをり、「前侍従様」と並べて「御隠居様（山内容堂）」と書いてある。これは明らかに、この日記の筆者が何かを錯覚したための誤記なのであるが、ここに中山忠光と一緒に山内容堂の登場してくることは、吉村虎太郎はじめ土佐勤王党一同の切実なる願望ではあつたのだ。では、なぜそのやうな期待を容堂にかけたのか？　それは簡単にいつて、容堂が勤王党のまへでつねにそのやうに振舞つたからである。

※14

(1)　それに、「一藩勤王」の実を上げるためには容堂を動かす以外に方法はあり得ないことは、あらためて言うまでもない。文久三年のこの時期、京都の町は尊攘派の天下であるといっても、土佐藩内での勤王派は郷士と庄屋ばかりで、士格の者で勤王を唱える者は下層のなかに何人かいる程度にすぎないのである。だが、とくに武市を中心とする尊王の一派が、容堂によせる期待の強さは何かそれだけではなさそうだ。武市瑞山が無類の天皇好きで、天皇の話を持ち出すとたちまち泣き出すということは以前に述べたが、武市は容堂に対してもまた直ぐに泣きたくなるような忠誠心を持っていたのではないか。それは単なる忠誠心というより、もっと情念に近い執着心のようなものであったかと思われる。そして、そのことは容堂自身もよく心得ており、武市の何処を押せばどういう反応が出るかといったことを、容堂はほとんど本能的に知悉して、むしろ武市に会うときは、その操作を愉しんでいるかのようでもあった。こんども、尊攘派が唐橋村の惣助の生首を藩邸の門前に供えていったのを見て、側近の乾（板垣）退助などが、「これ以上、武市一派をのさばらせておくわけには行かぬ。こうなったら、わしが武市を斬る」と、しきりにイキリ立つのを見ると、容堂はこれをたしなめた。武市を殺すことは簡単だが、そのまえにもっと訊いておかなければならないことがある、と容堂はみずから武市の懐柔にかかった。その結果はどうであったか。武市は、二月十七日づけで妻の冨子あてに送った手紙の中で、次のように述べている。／一、この間うちハ日々、容堂様へ御目通りいたし、御懇命をいただき候。そのうち、この間、御前にて御酒をいただき、御手づから御てふし（銚子）を御取りにて、尽力の礼についでやろふと御意にて、御上ミの御しやくにて、いただき候。半平太は酒ハきらい、菓子が好きかとて、御菓子一と箱、御前にていただき候。実に身にあまり、有り難き事にて候。／この武市の手紙では、「この間うちハ日々、容堂様へ御目通り」と、**毎日のように容堂と会っているかのようだが、実際はどうだったのだろう。「この間」とあるのは年譜その他の記録から多分、二月二十二日のことかと思われる。**前述のように乾退助や小笠原唯八などは、尊攘派の「天誅」に憤慨して、武市一派を一人ずつ容堂公の名儀で藩邸に呼びつけ、その場で殺してしまうことを主張していたのであるが、武市はこの日、容堂から召し出されたのではなく、自分の方から「謁見をたまわりたい」と出向いてきたものだ。勿論、**武市は**、乾など容堂の側近と自分たちとの間に険悪な空気が漲っていることは承知していたが、彼自身もまた配下の岡田以蔵などが血に飢えた殺し屋さなが

らに暴れまわるのには手を焼いていた。そこで武市は、容堂に会って直きじきに、前年閏八月以来の「天誅」の件を告白すると同時に、自分たちが尊攘派の立場で尽力してきたことを認めて貰いたい、と願い出た。つまり平たくいえば〝手打ち〟を申し込んだわけだが、武市はありったけの誠忠を披瀝する意味で、勤王党血盟署名簿を容堂に差し出し、また京都での「天誅」ばかりでなく、連枝家老の同意の下に勤王党同志の中から吉田暗殺の刺客も出したというようなことまで**匂わせた**――と、『維新土佐勤王史』は述べている。武市の話を聴くと、容堂は大層機嫌がよく、／「よし、**そち**の心持はよくわかった。わかったから、そういう面倒なものはもう焼いてしまえ」／と、勤王党の名簿を武市の目の前で引き裂くと火鉢の中でくべさせた。人払いをしてあった席に、頃合いをみて酒が運ばれる。／「尽力、ご苦労であったな」／と、容堂は銚子をとって酌をしてやり、白面大兵の武市が目のふちを赤くしながら、ぎこちない手つきで盃を口にはこぶのを見ると、／「そうか、半平太は酒は嫌いで、好きなものは菓子か」／と、からかいながら、早速、菓子箱をとりよせて、武市にそれを持たせた。そして武市は、そのことを、「実に身にあまり、有り難き事にて候」と、女房に手紙で知らせてやるという次第だ。／武市のこの感激ぶりは、その単純素朴さで、現代のわれわれを驚かせる。おそらく武市は、この日の容堂の打ちとけた態度から、容堂上京以来、甚しく悪化していたこれまでの対立感情はすっかり解消されたものと思ったであろう。何せ、**こちら**が吉田の一件にいたるまで、自分たちのやってきたことを打ち割って話したのに、容堂公はあえて過去は問わぬといわれて、少しもこれを咎められることはなかったのだから、と。しかし容堂の上機嫌は、いうまでもなく武市の自供が吉田殺害のことにまで及んだためである。下手人や背後関係などは、武市の供述をまつまでもなく、すでにその何層倍もハッキリしたことが容堂にはわかっている。だが、腹立たしいことに、これまで容堂は、そのわかっていることに手出しができなかった。下手人逮捕のために藩庁から派遣された捕吏井上佐市郎は、前年八月、大坂心斎橋で殺されており、また十一月には下横目広田章次も伏見で絞殺されたうえ裸体で淀川に投げこまれている。そういうことも武市一派の仕業にきまっているのだが、京都警備、つまり警察の役目をしているのが武市一派なのだから、取締りの出来ようはずがない。しかも、吉田事件の背後には容堂の養父や二人の実弟までが絡んでいて、容堂は**ひとり聾桟敷**におかれているわけだから、尋常一様のことでは事件の究明に乗り出すこともできなかった。それが、こんどの武市の自供でようやく解明の端緒をつかんだのだから、容堂としては笑うまいとしても思わず笑いがこみ上げてくる心持で**あったはずだ**。／容堂は、平素短気な性格で知られている半面、非常に緻密な計画性も持っており、勤王党に対処するに**当っても**、決してあわてて弾圧にかかろうとはしなかった。**むしろ**、平井収二郎の他藩応接役を免職にしたあとは、中岡慎太郎を徒目附兼他藩応接密事係に登用したり、また勝海舟の口添えもあって坂本龍馬の脱藩罪を赦免して帰藩を許すなど、つとめて勤王党には寛大な処置をとっている。しかし、その間、容堂が平静であったかといえば、そんなことはなかった。逆に内心は毎日、イライラしつづけていた。とくに三条実美、姉小路公知など、尊攘派の公卿が朝廷内を壟断して、ことごとに天皇の名で無謀な攘夷論を持ち出し、その実行を幕府に押しつけようとするのに腹を立てた。尊攘派の公卿のうしろには、長、土、両藩を中心に諸藩の過激派、志士、浪士などがついており、結局彼等が、内心公武合体をのぞんでいる公卿たちの口を封じているのである。これでは、あらかじめ容堂がもくろんだ根廻しも出来ようはずがない……。容堂がそのイラ立たしさを爆発させたのは、二月二十四日の夜である。その日、容堂は早くから自室に閉じこもって一人で酒を飲んでいた。そこへ土方楠左衛門と、間崎哲馬がやってきて、謁見を強要した。取り次ぎに出た者は、勿論この要求を断った。夜も遅いし、容堂の機嫌のよくないことを知っていたからである。しかし、間崎や土方は、緊急に機密の用があるから、と言い張って帰ろうとしない。押し問答をかさねているところへ、容堂が酒のせいで青白くなった顔を覗かせた。そして、間崎の顔を見ると、やにわに怒りに振える声で、どなりつけた。／「貴様はいま頃、何をウロウロしておる。即刻かえれ」／間崎が何か言おうとして口ごもりかけると、容堂は一層声をあららげた。／「貴様は先年、帰国の途上、何をしたか。下賤の身をかえりみず、ひそかに青蓮院宮から令旨を申し請けたことは知れておるぞ、不届なる奴、僭上至極……」／間崎哲馬は、覚之助の手紙にも出てきた琢二郎の**従弟**であるが、学問にすぐれ、平井収二郎と並ん

で勤王党の最も有力な領袖であった。この日、間崎は平井を他藩応接役に復活させるよう嘆願するつもりでもあったのだが、いまはそれどころではなくなった。たしかに間崎は前年、豊範の供をして江戸から国許へ引き上げる途中、京都で青蓮院宮に要請して、土佐の藩論を勤王に変えるようにという令旨をもらい、それを在国の隠居山内豊資に取り次ごうとした。勿論、ことは秘密を要するので容堂にも黙っていた。しかるに青蓮院宮は、**そのことを**江戸の容堂の許に通報していた。**そうした事情を**いま容堂の口からきいて、ようやく間崎は、先日平井が容堂の不興を蒙った理由が納得できた。青蓮院宮の令旨要請運動には平井収二郎、弘瀬健太の二人も関係していたからである。／それにしても、なぜ容堂は令旨要請のことをこの日まで黙っていて突然、今夜持ち出したのであろうか？　この点が、間崎だけではなく、在京の勤王党同志一同にとって最も不安に思うところであった。容堂公はいったい何を考えておられるのか――。とくに武市は、先日の謁見でおたがいに胸襟をひらいてわだかまった対立感情を棄てたつもりでいただけに、間崎の報告をうけると、俄かに心底に不気味な影が射しこんできた。そしてあの晩、自分が容堂の前で告白したことについて、ようやく後悔の念がきざすのを覚えた。しかし、過ぎ去ったことを悔んで何になろう。余計な取り越し苦労をしたところで仕方がない。容堂公ともあろうお方が、よもやこの半平太ごときを裏切ったりはなされまい、と武市はあえて自分自身に言いきかせた。／翌日、武市は、平井、間崎の二人に自首させた。ことがすでに発覚している以上、他に手の打ちようはないのである。そして、昨年青蓮院宮へ令旨要請したことは僭上の極みで誠に申し訳ない次第であったが、自分たちの胸には国を憂い藩を思うほかに何もなかった旨、誠意のほどを披瀝させた。／実際、この程度のことは、これまでなら武市のとりなしで、帰国の上、謹慎ぐらいですむところであったろう。間崎たちは

(2)　同右。但し　会って［…］→会つてゐるかのやうな口振りだが、年譜その他の記録では、この頃武市が容堂に会つたのは二月十二日だけである。武市は、→武市は　匂わせた→しやべつた　そち→おぬし　こちらが→こちらが洗へ浚へ、ひとり聾桟敷→一人、つんぼ桟敷　あったはずだ→あつたらう　当っても、→当つて　むしろ、→むしろ

徒弟→弟　そのことを→そのことを直ちに　そうした事情を→そのことを

(3)　しかし実際に容堂が、少しでも郷士や勤王党に好意を持つてゐたかといへば、そんなことはなかつた。たしかに容堂は、諸大名のなかでは松平春嶽などと並んで開明派であつたらうし、土佐の歴代藩主のなかでは最も革新的であつたにちがひない。しかし容堂が門閥保守派に反対したのは、自身が傍系の末流から出て一代限りの条件つきで藩主に就き、しかも先々々代藩主豊資の監視をうけて何事も意のままにならぬといつた事情があつたため、本心では下士の集団である勤王党に同調する気は決してなかつた。その屈折した心情は、薩摩藩主の父親でありながら、自身は生涯藩主の地位にはつけなかつた島津久光と似通つたものがあるかもしれない。久光も自藩の軍事力経済力にものをいはせて幕府に対抗したが、下級武士の主導する勤王党には様ざまな弾圧を加へてゐる。ただ、容堂は久光とも違つて、藩として薩摩ほど強大な実力はなく、しかも自分の周囲には豊資をはじめ旧弊な門閥家が生き残つてゐたから、この隠然たる勢力を抑へるには何等か他の力を借りる他はなかつた。吉田東洋のゐた頃は、この精力的な革新官僚の一派が実力で無能な旧門閥派を圧倒してゐた。しかし、その東洋が勤王党に殺されると、容堂はイヤでも一応勤王党と手を結ばざるを得なかつたわけだ。／かうした容堂の内心の動きは、或る程度までは勤王党の連中にも察しがついてゐた。とくに武市は、容堂の公武合体論が幕藩体制擁護の佐幕論であることはよく知つてゐた。にも拘はらず勤王党が容堂に期待をかけつづけてゐたのは、それ以外には彼等の運動をすすめる途がまつたくなかつたからである。はやい話が藩が勤王にならないかぎり、彼等はしよつ中、脱藩を繰り返さなければならない。だから土佐の勤王党は「脱藩勤王」といはれるのだが、藩を離れた無籍者は一見自由であつてもその末路は本間精一郎の例が示すやうに哀れである。命は惜まないとしても、孤立した亡命の暮しは長い間には精神を荒廃させ、結局、誰からも信用されなくなつてしまふ。それで武市は極力、脱藩者を出さぬやう努力してきたのであるが、それもすでに限界にきてゐた。このうへは何とか藩論を勤王一本にしなければならないが、それには容堂を動かす他はない。／しかし、その容堂は彼等の願望とは裏腹に上洛以来、露骨に勤王党に冷淡な態度をとりはじめた。まづ、武市の第一の股肱、平井収二郎

を他藩応接係から下ろし、その他の下士も応接係や探索係の役を一斉に免職にした。これに憤慨した勤王派は、容堂が目を掛けた学者や商人を斬つて、その首を容堂邸の門前に置くなどのイヤガラセをしたが、そんなことでは容堂は少しも動揺せず、逆に決定的な痛棒を勤王党のうへに下した。……間崎滄浪といふのは武市と並んで土佐勤王党に大きな影響力を持つ漢学者であるが、前年豊範について江戸にいつてゐた頃から、土佐の藩論を勤王にかへるやうにといふ令旨を青蓮院宮に要請し、それをひそかに在国の隠居山内豊資に取りつがうとしてゐた。勿論、間崎も容堂が豊資と仲の悪いことを知らないはずはなかつたが、武市が門閥保守派と密約して東洋暗殺に成功した例にならはうとしたのであらうか。とにかく間崎は江戸から土佐へ帰る途中、弘瀬健太をつれて京都へ寄り、平井収二郎を訪ねて、容堂の態度が最近ますます勤王党に冷たいことをきくと、翌日の夜、強硬に容堂に面謁を求めた。すると、折から酒気をおびてゐた容堂は、やにはに、「間崎には前々帰国を申し付けたるに、途上、私かに青蓮院宮の令旨を申し請くるとは、僭上至極、不届なる奴」／と大声に面罵した。じつは容堂は、この間崎の秘密運動を青蓮院宮からの通報をうけて上洛後早々に知つてゐたのである。元来、孝明天皇は外国人には生理的嫌悪感があつて攘夷は主張されたが、政治は幕府にまかせたがよいといふ意向であつた。したがつて朝廷の代弁者青蓮院宮と公武合体論者久光・容堂との間は、きはめて意志が疎通しやすく、内々緊密な連絡がとれてゐた。もし武市が、かういふ間崎たちの密謀を前もつてきいてゐたら、必ず中止させたであらうが、武市が事情を知つたのは、その翌日である。武市は深く嘘息したまま、しばらくは言葉も出なかつたが、事が発覚してゐる以上、他に手の打ちやうもなく、間崎、平井、弘瀬の三人に自首させ、その胸中に国を憂ひ藩を思ふの外はなかつた旨、披瀝させた。／普通なら、武市のとりなしで、間崎たちは帰国の上、謹慎ぐらゐですむところであらう。

※15

(1) ただ、問題はここへきて時勢の風向きが微妙に変ろうとしていることだ。勿論、京都の政情は前年から引き続いて尊攘派にとって圧倒的に有利に進んではいる。だが、前年の夏から冬へかけて急上昇してきたその気勢は、ことしに入ってからは何か一本調子では進めない気配が出はじめていた。／しかし、それよりも一層重要な事柄を、武市や、間崎、平井たちは見落していたかもしれない。それは容堂と養父豊資との間にあった反目のことである。容堂が傍流の、しかも側室の出であるために、藩主に就くときさまざまの条件をつけられたことは、何度も述べたとおりだ。二六時中、豊資の監視下におかれ、嫡子が生れてもその子は藩主の地位につくことは許されず、次期藩主には必ず豊資の末子豊範をつける、等々。しかも豊資は、頗る放縦な性格であり、それがわざわいして天保の改革によって失脚させられた。そのことを根に持ってか改革派を敵視し、容堂が藩政の改革をはかるたびに旧弊な門閥家を動かして、ことごとにこれに掣肘を加えた。容堂が決して排幕論者ではなかったにもかかわらず、しばしば尊王主義を唱えた裏には右のような事情があった。その後、容堂は吉田東洋を登用し、吉田配下の革新官僚は実力で無能な門閥保守派を制圧したが、こんどはその門閥派が武市一派の勤王党と気脈を通じて吉田東洋を殺害させた。吉田事件を容堂の側から眺めれば、そういうことになる。だから容堂にとっては、武市一派の勤王党も憎いにはちがいなかったが、豊資と門閥保守派に対する恨みは、それ以上に骨身に徹して忘れ難いものがあった。／しかるに、間崎哲馬たちは、青蓮院宮の令旨を手に、またしてもその豊資とひそかに接近をはかっているというのである。容堂としては、まさに逆鱗に触れられるおもいであったに相違ない。したがって、彼等が青蓮院宮に令旨を申請したことを自首して来たところで、寛大な措置を期待できる道理はなかった。ましてや、この時期の容堂は、すでに勤王党弾圧の不退転の決意をかためていたのである。／容堂は、松平春嶽、一橋慶喜、島津久光、それに京都守護職松平容保などと集って、将軍家茂の支援を協議したが、意見のまとまらないうちに尊攘派の強硬論に押し切られて、まったく何の成果もなく、三月二十六日、帰国の途につかざるを得なかった。そして、平井、間崎の両人も、四月一日、国許に檻送され、土佐に着くと、在国中の弘瀬健太も一緒に、高知山田町の獄に収監された。

(2) 同右。但し　である。→である――。等々。→等々……。

(3) 問題は、事を隠密のうちに運んだといふ点であるが、武市は容堂の疑念

をとくために、先年、土佐勤王党を結成したときの同志の血盟書――覚之助の他に権馬や覚馬が署名してゐる二百名ほどの血書――を急遽、国許から取りよせて容堂のまへに呈出した。すると容堂は、「その方どもの志、過分にうれしく存ずるぞ」と、手づから盃を武市にあたへ、血書は「こんなものがあると却つて世間の不審を招くだけだ」と焼き棄てさせた。しかし、これで容堂の機嫌がなほり、間崎、平井たちの罪も許されたかと思ふと、さうはならなかつた。第一、容堂は決して一時の感情で彼等をどなりつけたのではない。平井収二郎を他藩応接役から下ろしたのも、じつは平井が三条実美、姉小路公知などの公卿のところへ入りびたりになつてゐるのを青蓮院宮からきかされて、朝廷内の過激攘夷派と勤王党との間を裂くためであつたし、また間崎については何よりも、勤王党が隠居豊資を動かして門閥保守派と結びつくことを警戒したからである……。容堂は、すでに江戸や京都では抜群の才気を示して「名君」の声望があつたが、藩内での地位は必ずしも安泰ではなかつた。それは容堂が藩主について以来、ペルリ来航で幕府が外交問題によつて揺らぎはじめるまで、義父の豊資にいじめ抜かれたといふやうなことばかりではない。最も身近かな例として、門閥保守派と勤王党が気脈をつうじて吉田東洋を殺したといふことを、容堂は骨身に徹して忘れ兼ねてゐた。／結局、四月一日、間崎と平井は土佐に檻送され、さきに帰国してゐた弘瀬と三人、下獄したが、間崎の罪状は江戸で度たび料理屋に行き使途不明の金十五両余りを消費したといふことで、令旨要請のことには言及されてゐない。これは令旨の問題に触れることが、当時の情勢として輿論操作上、不利だつたからであらう。

（なりた・あかり）